

国営伊那西部農業水利事業

— 緊急発掘調査報告 —

大境・中原・細ヶ谷B遺跡

1984

伊那市教育委員会

関東農政局伊那西部農業水利事業所

伊那市史編纂委員会

国营伊那西部農業水利事業

— 緊急発掘調査報告 —

大境・中原・細ヶ谷B遺跡

1984

伊那市教育委員会

関東農政局伊那西部農業水利事業所

伊那市史編纂委員会

序

大境・中原・細ヶ谷B遺跡の発掘調査は昭和58年10月19日から同年12月8日にかけて、伊那市西春近小出3区宮の原・細ヶ谷両部落にわたる地籍で実施された。この発掘調査の契機となったのは関東農政局伊那西部農業水利事業所によって行われる西部送水管付設工事事業による。従って、地権者との交渉に於いて困難な問題点が累積されていた。

発掘調査は、友野団長指揮のもと、日本考古学協会会員、長野県考古学会会員、地元土地改良区役員、地元発掘作業員各位の献身的なご努力によって調査の完了をみた。晩秋から初冬にかけての調査だったために毎朝の霜柱には悩まされた。

さて、発掘実績はこの報告書の中にまとめてあるので省略する。一般的にみて今から7000年位前の縄文早期から今から500年位前の中世後半までの遺構が発見され、この地域の歴史解明によき資料を提供してくれた。

最後に、今後、この報告書が大いに活用されることを要望します。

昭和59年3月9日

伊那市教育委員会

教育長 伊澤 一雄

まえがき（大境・中原・細ヶ谷 B 遺跡の環境）

位 置

大境遺跡は長野県伊那市西春近宮の原大境地籍に，中原遺跡は伊那市西春近宮の原中原地籍に，細ヶ谷 B 遺跡は伊那市西春近細ヶ谷にそれぞれ所在している。遺跡地の現況は大境遺跡では畑作（一部は野菜畑，桑園），竹林，山林。中原遺跡では桑畑，山林。細ヶ谷 B 遺跡では桑畑にそれぞれ利用されている。

遺跡地の展開している標高を測定し，その概数を記すと次のようになる。大境遺跡717m～725m位，中原遺跡は711m～727m位，細ヶ谷 B 遺跡は720m位で，ほぼ南北に一直線上に並んでいる。

遺跡の存在する地点は北側は戸沢川の上流に，南側は小戸沢川の上流にはさまれており，沢をへだてた状況下で前述した三遺跡は並んでいる。遺跡の並び方は北から大境遺跡，中原遺跡，細ヶ谷 B 遺跡の順である。

これらの遺跡に至るまでの経路は二つの場合が最もわかりやすい。一つとしては国鉄飯田線下島駅で下車し，駅前の国道 157 号線を北へ 200m 程行くと伊那バス戸沢橋停留所がある。この停留所の北側を東へ流れているのが戸沢川である。この戸沢川の川沿に道路が西へ向って開けており，これを 500m 位行くと三叉路があり，これを右へると西春近北小学校へ至る。逆に左へ道をとって戸沢川を渡り，400m 位行くと右手に進路をとり，西方へ行くと左手に深妙寺の林が，逆に右手に伊那農業協同組合のカントリーエレベーターの白い建物が見える。大規模農道を横切って西へ向くと，目の前に宮の原会所がみえ，この会所付近に散在している集落が宮の原部落であり，この部落の北はずれが大境遺跡に，中央部付近が中原遺跡に，宮の原部落と細ヶ谷部落の境界線上に細ヶ谷 B 遺跡がある。これら三遺跡の西側すぐ近くに中央自動車道が走っている。

もう一つの道順としては次のコースがある。国鉄飯田線伊那市駅を降りて，国道 153 号線を南へ 2 km 程行くと，天竜川の支流である小黒川が西から東へ流れている。この小黒川は旧伊那町と，旧西春近村の境界線を成していた。この川を渡って最初の道路を右折すると北島屋工業所と言う製材所がある。この製材所前の道を西へ向けて登って行く。この道路は天竜川と小黒川とによって形成された河岸段丘崖面に開けているために急折したり，急勾配である。この坂を登り切ってしまうと通称「小出」と言われている平坦面の穀倉地帯が開けている。この所に東西に幅広く直線道路が走っており，この道路を約 2 km 程西へ行くと山本部落に到り，山本部落の会所付近を左折して南へ 500m 程行くと常輪寺が右手にあり，この南側に戸沢川の上流の沢があり，この沢をわたり切った地点が大境遺跡の東端部にあたる。

地形・地質

伊那市西春近地区の地形を考えてみるに大きく分けて三つの地形成因が成り立つと思われる。その一つとして，天竜川，あるいは三峰川によって形成された氾濫原，いわば沖積世面。もう一つと

して、天竜川あるいは天竜川の支流によって形成された河岸段丘面、いわば洪積世台地面。最後の一つとして中央アルプスの前山と考えられている権現山塊より広がる小さな山麓扇状地面があげられる。

伊那谷は天竜川をはさんで両岸に数段にわたる河岸段丘が形成されている事実が一般的であるが、西春近の場合は一段の河岸段丘面が大部分である。わずかに表木区下村部落付近は二段の河岸段丘面が形成されている。

西春近地区の地形は複雑多岐である。この地形を形造せしめた理由には天竜川の支流である大小様々な河川で存在している。この河川は中央アルプスより流れ出すわずかな水を集めて川をなし、最後に天竜川に注いでいる。前述した地形であるために、上流はほんのわずかな川であるが、天竜川と接する地点では極めて見事な開析地形が発達し、30mを越す段丘崖を形成している。これらの小河川を北から順に記してみると次のようになる。「小黒川、戸沢川、小戸沢川、犬田切川、猪の沢川、前沢川、大洞、藤沢川、堂沢川、大沢川」

次に、地質面から西春近地区を考えてみよう。氾濫原面は耕作土の下に厚い礫層が覆っている。洪積世台地面は耕作土の下に厚いローム層が覆っており、小河川の段丘崖面のところどころに第四浮石層が見えている。基盤となす礫層ははるか下層に存在しており、その深さはまちまちであって一定ではない。山麓地帯は後背の山からの押し出しがしばしばあったとみえて、何回も砂礫層の堆積がみられ、ローム層に達するまでには、場所によってまちまちであるが数mに及ぶものと思われる。

次に岩石の面から西春近を概観してみる。氾濫原である沖積面は天竜川の礫、三峰川の礫、その他各々小河川の礫が混じり込んでいる。小黒川、犬田切川、猪の沢川、藤沢川は単なる花崗岩が、戸沢川、小戸沢川は花崗岩に混じってホルンヘルスがみられる。これは両河川の上流細ヶ谷地区にホルンヘルスが存在しているために、土砂と一緒に川に流れ込んだのであろう。



西春近南部地区の小河川の岩石は大田切花崗岩が主体を占めており、そのなかには亜種の岩石である赤木花崗岩が含まれている。赤木花崗岩について「伊那市史・自然編」で次のように記してある。

赤木花崗岩—この岩石は、赤木西方にみられる小さな岩体で石英・斜長石・黒雲母からなる中粒黒雲母花崗閃緑岩であるが、白雲母・角閃石をふくんでいないことと、そしてカリ長石が非常に少ないことなどが主なる特徴といえる。この岩体は、この付近に観察されるいろいろな花崗岩類のうちのどれと近縁関係にあるのか、あるいは属するのかわからないけれども、分布上からみるかぎりにおいては、大田切花崗岩の中の一つとして、白雲母とカリ長石の岩相としてあつかってもよいようにも考える。


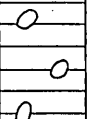
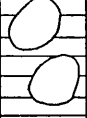
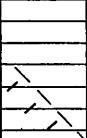

最後に大境遺跡・中原遺跡・細ヶ谷B遺跡のボーリング調査結果を掲載しておく、この資料提供は関東農政局伊那西部農業水利事業所によるものであることを記しておくと同時に感謝致す次第であります。

標尺	標高 (M)	深度 G.L (M)	層厚 (M)	土質記号	土質名	色調	観察記事
	720.71	0.00					
0							0.05M 付近迄、草根少量混入 2M 付近迄、 $\phi 0.5 \sim 20\%$ 混入
1				○		暗黄灰	1.40M 付近より暗茶褐色となる
2				○			
3				△		暗茶褐	2.00~4.95M 付近間、礫小さく細礫多い 2.50M 付近より淡黄灰となる
4				○			3.90M 付近より、所々淡灰色見られる
5	715.52	5.25	5.25	○	礫混り粘土 (凝灰質)	淡黄灰	4.95~5.25M 付近間、 $\phi 20 \sim 25\%$ となる。礫は亜角状である
6	715.38	5.39		○	砂	暗灰	$\phi 20 \sim 50\%$ である 礫は亜角状である
7							
8							
9							
10							

大境遺跡中央部付近土層柱状図

標尺	標高 (M)	深度 G.L (M)	層厚 (M)	土質記号	土質名	色調	観察記事
	718.65	0.00					
0							全体にシルト及び粘土多く混入する φ100%以上の玉石混入
1							
2	716.15	2.50	2.50		玉石混り砂礫	暗褐 暗灰	2.15M付近より転石に当り、掘進困難となる
3							2.50Mより連続移化的に砂礫となる 礫径若干小さ目となり 最大φ80%位のものとなる 全体にφ20~50%位のもの主体とする 又、5.30M付近と5.80M付近にφ80%の礫混入する 6.40M付近より6.60M付近まで礫多いものとなる マトリクスはシルト分を主体としたものである 7.50~7.80Mまで粘土多く混入 全体的に小礫多く混入 又、所によりφ80%以上の礫混入 9~10M間、礫多いものである
4							
5							
6							
7							
8							
9							
10	711.20	7.45			砂 礫	暗灰	
11							
12							

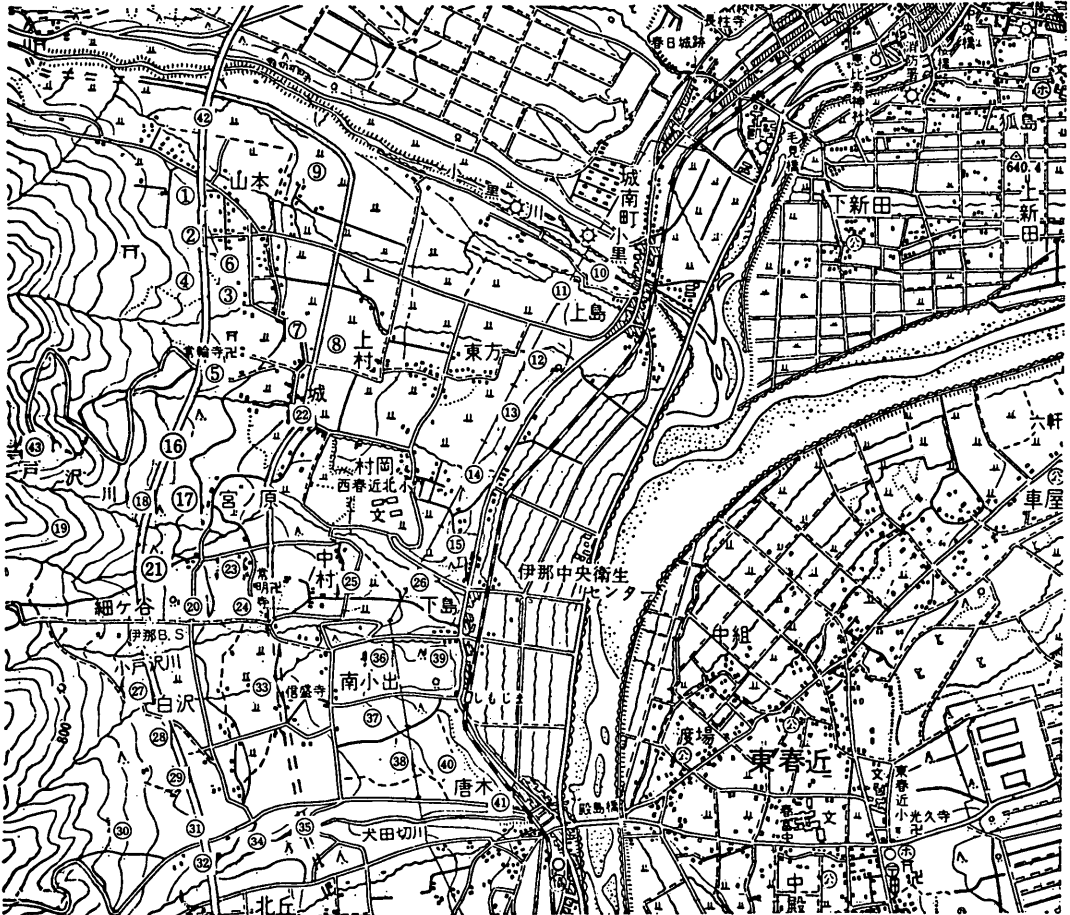
中原遺跡北端部付近土層柱状図

標尺	標高 (M)	深度 G.L (M)	層厚 (M)	土質記号	土質名	色調	観察記事
	722.82	0.00					
0	722.67	0.15	0.15		玉石混り砂礫	暗灰 暗茶褐	0.05M付近迄、砂利以下、 $\phi 100$ μ玉石混入
1							0.55M付近より暗黄灰となる $\phi 20 \sim 30$ μ混入 礫は亜角状である 粘土は凝灰質粘土と思われる
2	721.02	1.80	1.65		礫混り粘土	暗黄灰	
3	719.77	3.05	1.25		玉石混り粘土	暗黄灰	粘土は凝灰質粘土と思われる 1.80~2.00M付近、玉石($\phi 100$ μ以上)混入 所々玉石混える
4							4.60~4.70M付近間、礫($\phi 20 \sim 30$ μ)混入 少量の浮石、スコリア混入
5	717.72	5.10	2.05		粘土 (凝灰質)	暗黄褐	
	717.37	5.45			礫混り凝灰質粘土	暗黄褐	$\phi 20 \sim 30$ μ礫は亜角状である
6							
7							
8							
9							
10							

細ヶ谷B遺跡北端部付近土層柱状図

周辺遺跡及び歴史的環境

伊那市西春近北部地区で現在確認されている遺跡は43カ所を数える。これらの遺跡の内訳を「長野県史 考古編」により次のように記す。記述の仕方は位置及び西春近北部地区遺跡分布図に掲載した番号順による。



位置及び西春近北部地区遺跡分布図（1：30,000）

遺跡の名称

- ①城平上 ②城平 ③常輪寺跡 ④宮林 ⑤山の根 ⑥山本 ⑦常輪寺下 ⑧上村 ⑨北条 ⑩上島下 ⑪上島 ⑫東方B ⑬東方A ⑭村岡北 ⑮村岡南 ⑯大境 ⑰中原 ⑱百駄刈 ⑲西垣外 ⑳細ヶ谷A ㉑細ヶ谷B ㉒小出城（城南） ㉓宮の原 ㉔浜射場 ㉕中村 ㉖中村東 ㉗山寺垣外 ㉘白沢原 ㉙名廻 ㉚名廻西古墳 ㉛名廻東古墳 ㉜名廻南 ㉝児塚 ㉞鎮護塚西古墳 ㉟鎮護塚東古墳 ㊱カンバ垣外 ㊲丸山城跡 ㊳南小出南原 ㊴薬師堂 ㊵唐木原 ㊶唐木古墳 ㊷山本田代 ㊸山王

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
1	城平上遺跡	西春近山本	扇状地	(縄) 中期土器 (平) 土師器, 須恵器 (昭47年発掘)
2	城平 "	" "	"	(縄) 竪穴住居1 中期末・後・晩期土器, 磨石, 石棒 (平) 竪穴住居8 土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 砥石, 刀子 (中) 地下倉3, 小竪穴2, 墓壇4 内耳土器, 陶器(黄瀬戸, 天目, 備前), 青磁, 石臼, 砥石, 刀子, ピンセット状鉄製品, 釘, 火 打金具, 古銭 (昭47年発掘)
3	常輪寺跡	" "	"	(中) 寺跡
4	宮林遺跡	" "	"	(縄) 加曾利E式, 打石斧, 焼石, 押型文土器 (昭57年発掘)
5	山の根 "	" "	"	(縄) 前期土壇, 中期竪穴住居2, 土壇1 粕畑式, 諸磯C式, 加曾利E式, 後期土器, 打石 斧, 砥石, 黒曜石片, クルミ (弥) 竪穴住居1 中島式 (平) 竪穴住居4, 小竪穴1 土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 銅製鏡 (中) 竪穴 内耳土器, 天目茶碗 (昭47年・57年発掘)
6	山本 "	" "	台地	(縄) 中・後期土器, 打石斧 (弥) 土器
7	常輪寺下 "	" "	扇状地	(縄) 中期竪穴住居18, 土壇7 梨久保式, 五領ヶ台式, 平出ⅢA式, 阿玉台式, 勝坂式, 加曾利E式, 大洞A・C ₂ 式 (奈) 竪穴住居1 土師器, 須恵器 (平) 竪穴住居1 土師器, 須恵器, 灰釉陶器 (中) 柱穴群 陶器(常滑, 中津川, 古瀬戸, 美濃, 黄瀬戸) 青磁, 轆羽口 (昭49年発掘)
8	上村 "	" 上村	"	(縄) 中期土器, 打石斧, 敲打器 (弥) 中島式
9	北条 "	" 山本	段丘	(縄) 中期竪穴住居8, 中期土壇4, 配石1 勝坂式, 加曾利E式, 石鏃, 打石斧, 磨石, 凹 石, 磨石斧, 剝片石器, 砥石, 棒状石器, 石錘 (奈) 竪穴住居1 土師器, 須恵器, 陶硯

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
				(平) 竪穴住居 2 土師器, 須恵器, 灰釉陶器 (昭49年発掘)
10	上島下遺跡	西春近上島	段丘	(縄) 黒浜式
11	上島 "	" "	"	(先) 剥片 (縄) 前期竪穴住居 2, 小竪穴 2 木島式, 北白川下層式, 黒浜式, 諸磯 A・B・C 式, 大歳山式, 打石斧, 磨石, 敲石, 石皿, 礫器, 横刃形石器, 棒状石器 (平) 竪穴住居 1, 小竪穴 1 土師器, 須恵器, 灰釉陶器 (昭48年発掘)
12	東方 B "	" 東方	"	(縄) 中期土器, 打石斧
13	東方 A "	" "	"	(縄) 前期竪穴住居 1, 小竪穴 1, ロームマウンド 2 大歳山式, 下島直後型式, 堀ノ内式, 加曾利 B 式, 打石斧, 棒状石器, 砥石 (弥) 竪穴住居 1 座光寺原式 (中) 内耳土器, 青磁 (昭49年発掘)
14	村岡北 "	" 村岡	"	(縄) 竪穴住居 1 平出皿 A 式, 五領ヶ台式, 阿玉台式, 加曾利 E 式, 打石斧, 磨石, 石錘 (弥) 石庖丁 (中) 堀 1, 道路址 1 内耳土器, 陶器, 砥石, 宋銭 (昭49年発掘)
15	村岡南 "	" "	"	(縄) 中期竪穴住居 1, 土壇 4 中期土器, 打石斧, 磨石, 凹石, 磨石斧, 剥片石器 (中) 内堀, 外堀, 柱穴群 2, 地下倉 2 内耳土器, 陶器 (黄瀬戸), 石臼 (昭49年発掘)
16	大境 "	" 宮の原	扇状地	(縄) 押型文土器, 加曾利 E 式, 局部磨製石斧, 石皿 (平) 竪穴住居 2, 小竪穴 1, 集石 1, 土壇 1 土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 須恵質紡錘車 (中) 中世陶器, 砥石, 青磁 (昭47年・58年発掘)
17	中原 "	" "	"	(縄) 後期土器, 打石斧, 凹石 (昭58年発掘)
18	百駄刈 "	" "	"	(縄) 早期土壇, 後期竪穴住居 6, 配石, 特殊遺構, 土壇 楕円・山形押型文土器, 撚糸文土器, 堀ノ内式, 加曾利 B 式, 石鍬, 打石斧, 凹石, 磨石, 磨石斧, 横刃形石器, 石錘, 敲打器, 石棒, 小型土

番号	遺 跡 名	所 在 地	立 地	遺 構 ・ 遺 物
				器, 土偶, 炭化物 (平) 竪穴住居 土師器, 須恵器, 灰粘陶器, 鉄製紡錘車, 刀子, 鉄針, 鉄釘 (昭47年発掘)
19	西垣外遺跡	西春近小出	扇状地	(縄) 加曾利E式, 打石斧, 敲石, 凹石
20	細ヶ谷A "	" 細ヶ谷	"	(縄) 中期土器, 打石斧, 横刃形石器 (昭54年発掘)
21	細ヶ谷B "	" "	"	(縄) 早期土壇6, 中期土壇1, 後期土壇3, 晩期土壇1 山形・楕円・格子目押型文土器, 撚糸文土器, 茅山式, 鶺ヶ島台式, 中期初頭型式, 後・晩期土器, 礫器, 特殊磨石, 打石斧, 石錘, 石製円盤 (昭47年発掘, 58年)
22	小出城(城南) "	" 城	"	(縄) 前期竪穴住居1, 中期竪穴住居2, 小竪穴20 茅山式, 諸磯C式, 下島式, 石鍬, 打石斧, 磨石, 磨石斧, 石匙, スクレイパー, 砥石, 棒状石器 (中) 内耳土器 (昭49年発掘)
23	宮の原 "	" "	"	(縄) 打石斧, 敲石斧, 石錘 (平) 竪穴住居1 土師器, 須恵器, 灰粘陶器 (中) 墓壇1, 暗渠1 内耳土器, 陶器(天目, 古瀬戸, 中津川, 黄瀬戸), 石臼 (近) 墓壇1 陶器, 古銭(寛永通宝), 煙管 (昭52年発掘)
24	浜射場 "	" 宮の原	段丘	(縄) 前期竪穴住居2, 中期竪穴住居2, 土壇 茅山式, 諸磯C式, 下島式, 下島直後型式, 勝坂式, 加曾利E式, 堀ノ内式, 加曾利B式, 大洞式, 石鍬, 打石斧, 磨石, 磨石斧, 石匙, 砥石, スクレイパー, 礫器, 敲打器 (中) 内耳土器, 陶器(天目) (昭49年・51年発掘)
25	中村 "	" 中村・下島	"	(縄) 前期末竪穴住居1, 土壇1, ロームマウンド1 大歳山式, 晴ヶ峰式, 踊場式, 凹石, 磨石, 敲石, 磨石斧 (弥) 後期竪穴住居6 後期土器, 磨石斧 (奈) 竪穴住居1 土師器 (中) 堀 (昭52年発掘)

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
26	中村東遺跡	西春近中村, 下島	舌状台地	(平) 土師器
27	山寺垣外 "	" 白沢	扇状地	(縄) 中期土壇 木島式, 中期初頭型式, 加曾利E式, 晚期土器 (中) 溝状遺構 青磁, 金属製品, 鉄片 (昭47年発掘)
28	白沢原 "	" "	"	(縄) 中期土器, 打石斧, 磨石 (平) 土師器, 須恵器, 灰釉陶器 (中) 陶器 (昭47年発掘)
29	名廻 "	" "	段丘	(縄) 楕円押型文土器 (平) 竪穴住居 1, 溝状遺構 1 土師器, 須恵器, 灰釉陶器 (昭47年発掘)
30	名廻西古墳	" "	"	(古) 円, 横
31	名廻東 "	" "	"	(古) 円, 横 直刀 3, 刀子 11, 鉄鏃 35, 金環 5, 銜 2, 白玉 6, 紡錘車, 土師器, 須恵器, 人骨片 (昭47年発掘)
32	名廻南遺跡	" "	"	(縄) 諸磯C式, 晚期土器, 打石斧, 横刃形石器 (平) 竪穴住居 1 灰釉陶器 (昭47年発掘)
33	児塚 "	" "	扇状地	(縄) 土壇, 溝状遺構, 集石 山形・格子目・市松押型文土器, 田戸上層式, 茅山式, 木島式, 加曾利E式, 礫器, 棒状石器, 敲打器 (平) 土師器 (昭53年発掘)
34	鎮護塚西古墳	" "	段丘	(古) 円, 横
35	鎮護塚東 "	" "	"	(古) 円 (径18.0, 高2.4), 横 直刀 2, 剣 1, 小刀 1, 管玉 8, 勾玉 3, 小玉 13, 棗玉 2, 土師器, 須恵器
36	カンバ垣外遺跡	" 南小出	"	(縄) 早期末～前期初頭竪穴住居 2, 中期竪穴住居 2, 土壇 6 木島式, 梨久保式, 平出ⅢA式, 勝坂式, 打石斧 (平) 竪穴住居 1 土師器, 須恵器 (中) 竪穴住居 2, 小竪穴 22, 柱穴群 4, 水路 1, 溝状遺構 1, 内堀, 中堀, 外堀, 井戸, 集石 1 内耳土器, 青磁, 白磁, 陶器 (常滑, 古瀬戸, 瀬戸), 鑿状石器, 砥石, 筒形状鉄製品, 棒状鉄製品, 鎌, 火打金具, 古銭, (開元通宝, 祥符元宝, 天禧通宝, 天聖通宝, 熙寧元宝, 元豊通宝, 洪武

番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物
				通宝, 永楽通宝), 焼米, 小豆 (昭53年・54年発掘)
37	丸山城跡遺跡	西春近南小出	段丘	(縄) 中期土器, 打石斧 (中) 堀, 小竪穴36 白磁, 陶器(古瀬戸) (昭54年発掘)
38	南小出南原 "	" "	"	(縄) 中期土器, 石鏃, 打石斧, 石錘, 磨石 (弥) 方形周溝墓1 中島式 (平) 竪穴住居1 土師器, 須恵器, 灰釉陶器 (中) 竪穴住居1, 堀1, 柱穴群1 陶器(天目, 黄瀬戸, 志野) (昭49年発掘)
39	薬師堂 "	" 下島	"	(縄) 中期土器, 石鏃, 打石斧, 磨石斧, 石錘 (弥) 中島式 (平) 土師器, 須恵器 (中) 青磁
40	唐木原遺跡	" 唐木	"	(縄) 諸磯C式, 勝坂式, 加曾利E式, 打石斧 (弥) 中島式 (平) 土師器, 灰釉陶器
41	唐木古墳	" "	"	(古) 円, 横
42	山本代 "	" 山本	"	(縄) 中期初頭型式, 後期土器, 打石斧, 磨石斧 (平) 竪穴住居6, 小竪穴 土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 鉄鏃, 刀子, 鉸具, 鉄滓 (中) 土鍋, 陶器(黄瀬戸, 天目) (近) 陶器, 青銅製品 (昭48年発掘)
43	山王 "	" 宮の原	山頂	(平) 灰釉陶器

中世に入ってこの西春近北部地域は小井亘氏が勢力を張っていた。小井亘氏の由来についてはさまざまの説が考えられているが、小井亘氏の祖は工藤氏であり、小井亘に長い間住んだことからその土地の名をとって小井亘氏と名乗ったと一般的に考えられている。小井亘氏の名が始めて出てくる文献として「吾妻鏡」があげられる。この事柄を時代順にそって列記してみると次のようになる。

安貞3年(1229)正月3日, 貞永2年(天福元年)(1233)正月2日, 嘉禎3年(1237)正月3日, 歴仁元年(1238)正月3日, 仁治元年(1240)正月3日, 仁治2年(1241)正月3日。

小井亘氏の動向について「小井亘文書」あるいは「工藤文書」と呼ばれる文書が5通残っており、これらの内容は議状, 争論, 裁許状であり、古い順に列記してみると次のようになる。

建長3年(1251)2月5日付の藤原能綱が嫡子師能に与えた議状。

建長3年(1251)2月6日付の藤原能綱が庶子宮熊わういに与えた譲状。

建長3年(1251)2月5日付の藤原能綱の譲状により、鎌倉幕府は嫡子工藤師能に建長3年12月14日付で所領安堵の下文を出したいわば安堵状。

建長4年(1252)8月7日付の小井亘兄弟所領相論裁許状信濃国春近領小井亘弥二郎師能と舎弟宮熊が代馬保信と相論、小井亘二吉郷内の田の事、北条時頼之を裁す。

正応元年(1288)11月3日付の幕府小井亘道覚(忠綱)の訴を斥けて盛綱には例の如く弁済せしむ。これに対し幕府は北条貞時の名における下文を下している。 (飯塚政美)

凡 例

- 1 今回の緊急発掘調査は西部開発に伴う、西部送水管事業で、第4次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
- 2 この調査は、西部送水管事業に伴う緊急発掘で、事業は関東農政局伊那西部農業水利事業所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、昭和58年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
- 4 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美, 友野良一

◎図版作製者

- 遺構及び地形実測図 小池 孝
- 土器拓影 小池 孝, 飯塚政美
- 土器実測 小池 孝
- 石器実測 小池 孝

◎写真撮影

- 発掘及び遺構 飯塚政美
- 遺 物 友野良一, 飯塚政美

- 5 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。
- 6 出土した遺物や遺構の図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

大境遺跡

目 次

目 次	(3)
挿図目次	(4)
図版目次	(4)
第I章 発掘調査の経過	(5)
第1節 発掘調査の経緯	(5)
第2節 調査の組織	(5)
第3節 発掘日誌	(6)
第II章 層 位	(8)
第1節 発掘地区の地層	(8)
第III章 遺 構	(11)
第1節 溝状遺構	(11)
第2節 土 壙	(12)
第IV章 遺 物	(12)
第1節 土器及び陶磁器	(12)
第2節 石 器	(15)
第V章 ま と め	(17)

挿 図 目 次

第1図	土層模式図	(8)
第2図	地形及び遺構配置図	(9)
第3図	第1号溝状遺構実測図	(11)
第4図	第1号土壙実測図	(12)
第5図	土器拓影	(13)
第6図	陶磁器実測図	(14)
第7図	石器実測図	(16)
第8図	石器実測図	(16)

図 版 目 次

図版1	遺跡全景
図版2	遺跡全景
図版3	遺 構
図版4	遺構及びテント
図版5	遺物出土状況
図版6	出土遺物
図版7	出土遺物

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として、竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに付設する計画が実施されて徐々に工事が進ちょくしている。伊那市においては、西箕輪・西春近・伊那地区がこれに該当し、昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡。昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡、金鑄場遺跡。昭和54年度に西箕輪上戸宮垣外遺跡、西箕輪中条天庄Ⅱ遺跡、小花岡遺跡。昭和55年度に西箕輪吹上桜畑遺跡の調査が行われてきた。昭和57年度は伊那船窪船窪遺跡、西町大坊城畑遺跡、西春近山本城平遺跡・宮林遺跡・山の根遺跡の緊急発掘調査を行った。

本年度は大境遺跡・中原遺跡・細ヶ谷B遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和57年8月31日 長野県教育委員会文化課白田指導主事が来伊し、伊那市教育委員会社会教育課職員、関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と三者協議を混じえながら予算査定を行う。

昭和58年9月21日 夜、宮の原会所で地権者と打ち合せをする。伊那市教育委員会職員と関東農政局伊那西部農業水利事業所職員が出席する。

昭和58年9月30日 伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

昭和58年10月1日 関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と伊那市教育委員会社会教育課職員立合いのもとに発掘調査地区に境界用のテープを張る。

昭和58年10月14日 伊那市教育委員会社会教育課職員が大境遺跡に該当する地権者宅を訪問し、発掘承諾書に署名、捺印してもらう。文化庁の補助金は当初は1,080,000円であったが780,000円に減額する。

第2節 調査の組織

大境遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊 澤 一 雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福 澤 総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤 羽 映 土	伊那市教育委員長
調査事務局	三 澤 昭 吾	伊那市教育委員会教育次長
〃	竹 松 英 夫	伊那市教育委員会社会教育課長
〃	柘 植 晃	〃 〃 課長補佐
〃	武 田 則 昭	〃 〃 係長
〃	高 木 いずみ	〃 〃 主事

第I章 発掘調査の経過

発掘調査団

団 長	友 野 良 一	日本考古学協会会員
副 団 長	根 津 清 志	長野県考古学会会員
”	御 子 柴 泰 正	”
調 査 員	福 沢 幸 一	”
”	飯 塚 政 美	日本考古学協会会員
”	小 池 孝	”

第3節 発掘日誌

昭和58年10月19日 曇時々雨 伊那市考古資料館にて発掘器材の整理、点検、修理を行う。

昭和58年10月20日 曇時々晴 午前中、発掘器材の整理及び点検、修理を行う。午後、大境遺跡へ器材を運搬する。

昭和58年10月21日 晴 現場へテントを二張り建てる。建て方は南北に長くし、南側のを道具用に、北側のを休憩用にする。

昭和58年10月22日 晴 グリット掘りを開始する。グリット掘りをした箇所は沢をへだてた大境遺跡の最も北側の地点であり、この付近のグリットより縄文中期と、縄文早期末葉の土器片が出土する。西側の山麓の押し出しが多くて、ルームまでは2 m位にも達していた。

昭和58年10月24日 晴 テントを建てたすぐ東側より掘り始めると同時に沢をへだてた竹林へグリットを設定し、それに基づいて発掘調査を実施する。ルーム層まで深くて、およそ3 m位を越していた。遺物の出土は少なく、石鏃1点と土器片少量が出土した。

昭和58年10月25日 晴 前日、設定したグリット地区内の掘り下げを進めていく。幾度も流れがあったとみえて地層の堆積が厚く、下部の土層面までには約3 mにも及んでいた。遺物の出土は何もなかった。

昭和58年10月26日 晴 昨日と同様の地区内の掘り下げを進めていくが、掘れども、掘れどもルーム層までは



発掘風景

深く、遺物は何も出土しなかった。

昭和58年10月27日 晴 本日より南側の桑畑を掘りはじめる。掘りはじめてみると、やや浅くなりつつあった。それでも下部までには1 m50cm位あり、地層の堆積も前の層よりやや浅くなり、遺物もやや出土しはじめる。南側の桑畑中央付近より土壙状の遺構がみられ、第1号土壙とする。さらに東西に流れた砂の堆積層がみられる。このなかから常滑焼と砥石が出土。第1号土壙のプランを確認し、その掘り下げを完了した。土壙の近くより青磁片が出土。

昭和58年10月28日 晴 砂の堆積した所は河となり、そのプランを確認し、掘り下げを完了する。さらにグリット掘りを南、南へと進めていくが遺物の出土はほとんどなかった。土層図の実測。第1号土壙の実測及び同遺構の写真撮影。前述した川を第1号溝状遺構とする。

昭和58年10月29日 晴 第1号溝状遺構の清掃をし、写真撮影をすると同時に実測をも行い、全測図を作る。グリット掘りを大境遺跡の南側で実施するが、遺物の出土量は極めて少なかった。

昭和59年2月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集。

昭和59年3月 報告書を刊行する。

(飯塚政美)

作業員名簿

酒井岩夫、北原一喜、池上大二、埋橋程三、大野田英、唐木由人、唐木淳、酒井とし子、城倉芳美、城倉すみ子、大野田三千代、網野実子、有賀文子、平沢長治、橋爪ちえ子、建石紀美子(敬称略順不同)

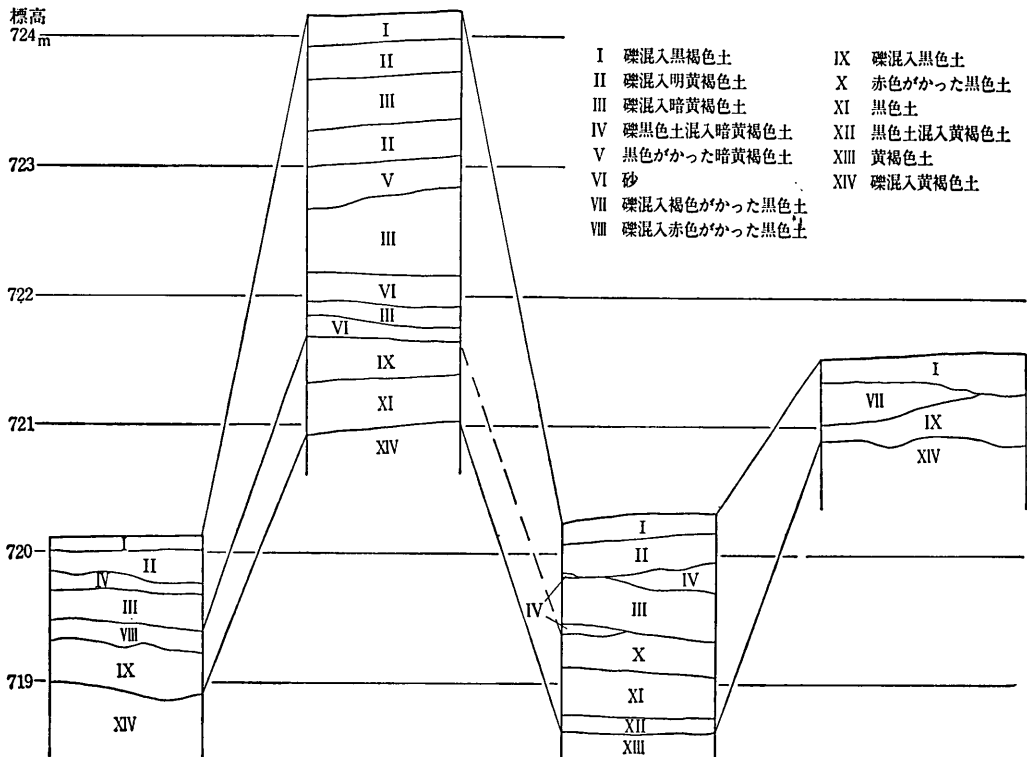
第II章 層 位

第1節 発掘地区の地層

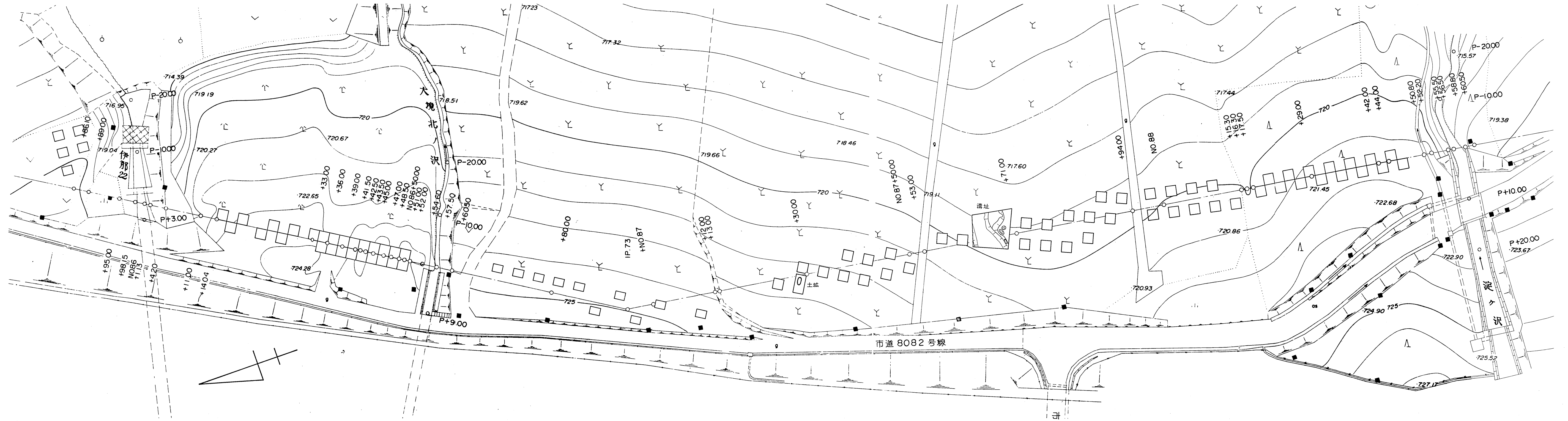
本発掘地区は山麓扇状地の扇頂部付近に位置しており、西から東への傾斜のために大雨がある度に土砂の流れが激しかったとみえて、何層にもわたる地層の堆積がみられた。第1図土層模式図より地層を表土面より下へ層序順に列記すると次のようになる。

礫混入黒褐色土、礫混入明黄褐色土、礫混入暗黄褐色土、礫黒色土混入暗黄褐色土、黒色がかつた暗黄褐色土、砂、礫混入褐色がかつた黒色土、礫混入赤色がかつた黒色土、礫混入黒色土、赤色がかつた黒色土、黒色土、黒色土混入黄褐色土、黄褐色土、礫混入黄褐色土。

仮りに遺構の掘り込み面をつきとめる作業は前述したような地層のために極めて困難な面を多く含んでおり、発掘調査は従来地層の安定した遺跡とは異なって、一枚、一枚の地層掘り下げ作業に慎重性が強く要求される。この作業を怠ると、遺構が存在していても、知らずに破壊してしまう危険度が多くなってくる。
(友野良一)



第1図 土層模式図



第 2 図 地形及び遺構配置図(1:400)

第Ⅲ章 遺 構

第1節 溝状遺構（第3図，図版4）

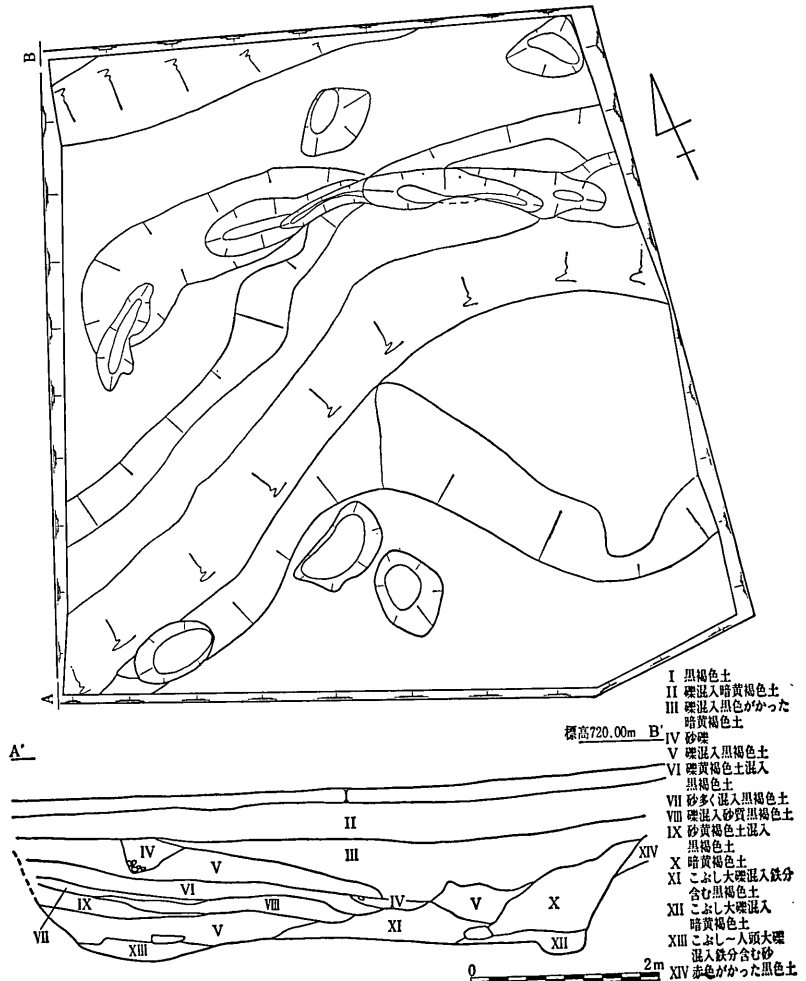
第1号溝状遺構は表土面から80cm位下った赤味を帯びた黒色土層面中に掘り込まれている。検出された位置は大境遺跡の中央部付近で若干凹地になっていた。溝の広がりには1 m 80cm～2 m 30cm位を測り、東西の長さは用地外のためにその全長は不明であるが、今回の発掘調査の状態からして、当然、西、東に伸びていることはまちがいないと思われる。

発掘調査地区の南東一帯は中段ができ、テラス状になっていた。壁面の状況は南、北壁ともになだらかな傾斜をしており、起伏に富んでおり、細礫の露出が目立った。

掘り込み面から底部までの深さは1 m～1 m 10cm位あり、溝状遺構としては深い方に属しているものと思われる。

底面は砂礫層より成り立ち、凹凸は顕著であった。底面のレベルは基盤が西から東へ傾斜しているために、東へ行くに従って徐々に低くなっていた。同面近くの土層は水が長期間流れたか、あるいは溜っていたかともみえて鉄分の赤味を帯びたところが部分的に認められた。

覆土は全般的に砂質分の多い土壌から成り立っており、本遺構の使用されなくなったあとも、



第3図 第1号溝状遺構実測図

第三章 遺 構

何回となく土砂の流入があった。

遺物は鎌倉後期から室町中期頃にかけての古瀬戸灰釉こね鉢、常滑大甕、古瀬戸天目茶碗の陶器片が相当量出土していた。しかも出土状況は底面上に密着していることからして本遺構は鎌倉後期から室町中期頃にかけて使用されたのであろう。砥石の出土もあった。

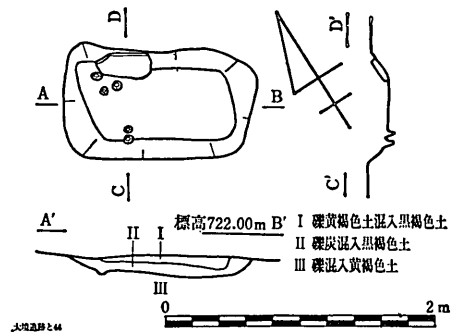
遺物の出土状況からして、これらの陶器片はバラバラなものが大部分であり、本遺構へゴミ捨場的に投げ込んだのではないだろうか。従って、本遺構の用途を追究するにはまわりの歴史的環境を徹底的に調査すべきであろう。

第2節 土 壙 (第4図, 図版3)

本土壙は前述した第1号溝状遺構の北側に発見された遺構であり、礫混入黄褐色土を15cm位掘り込んで構築してある。規模は南北77cm, 東西1m43cm位を測り、平面プランは部分的に突き出しているが、一般的に隅丸長方形を呈している。

壁面は砂礫土のために崩壊しやすく、外傾気味であった。床面は大般平坦で、ややかたくなっていた。

遺物は本遺構の南西壁の外側近くより宋青磁の優品な碗破片が1片出土している。(飯塚政美)



第4図 第1号土壙実測図

第四章 遺 物

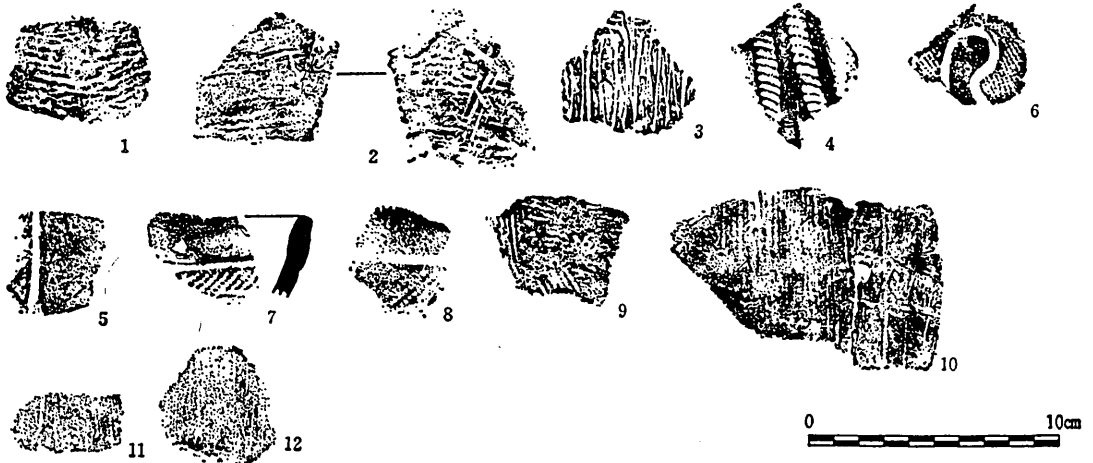
第1節 土器及び陶磁器

第5図(1~12)は遺構外出土の縄文土器である。(1~2)は胎土に多量の繊維を含む縄文早期後葉の土器片であり、(1)は細い燃糸文を、(2)は内・外面ともに貝殻条痕文をつけてある。(1)は赤褐色を、(2)は黒褐色を呈し、ともに焼成は不良である。(3~4)は縄文中期土器片であり、(3)は細い沈線を深く、あるいは浅く、垂下させてあり、一部は横位に施し、囲状になっている。明茶褐色を呈し、大きな長石粒が露出しており、焼成は良好である。(4)は大きな爪形をキャタピラ状に施してあり、多量の雲母を含み、赤褐色を呈し、器面が全般的にガラガラしていた。

(5~6)は縄文後期前半の土器片であり、(5)は無文地にやや幅広ろの沈線を垂下させてある。明茶褐色を呈し、焼成は良好。(6)は細かな縄文地を幅広ろの沈線をワラビ手状に走らせ、区画し、磨消文様を描出している。明茶褐色を呈し、焼成は良好である。

(7~8)は縄文後期中葉頃に位置づけられそうな土器片であり、文様構成はともに横位の沈線による磨消縄文である。両土器片ともに少量の雲母、長石を含み、(7)の焼成は良好であるのに対し、(8)は不良である。

(9~12)は縄文晩期の土器片であり、そのうちでも、(9)は縄文晩期前半に、(10~12)は縄文晩期後半に位置づけが可能であろう。(9)は細かな縄文が外面全面にわたって施されている。黒褐色を呈し、少量の雲母、長石を含み、焼成は良好である。(10~12)は条痕が無数にわたって縦位状に走っている。(10~12)は赤褐色を、(11)は黄褐色を呈し、ともに焼成は良好である。どの破片にも少量の長石を含む。



第5図 土器拓影

第6図 (1~16, 18)は全て第1号溝状遺構内から出土した陶磁器である。(1~4)は灰釉陶器の杯であり、(2)は口縁直下にわずかに焼き方によって生じた赤味を呈している。(3)は灰釉陶器の碗であり、外面のロクロナデは顕著である。(4)は底部破片だけであるので、その器型は不明である。無釉に近い状態となっている。

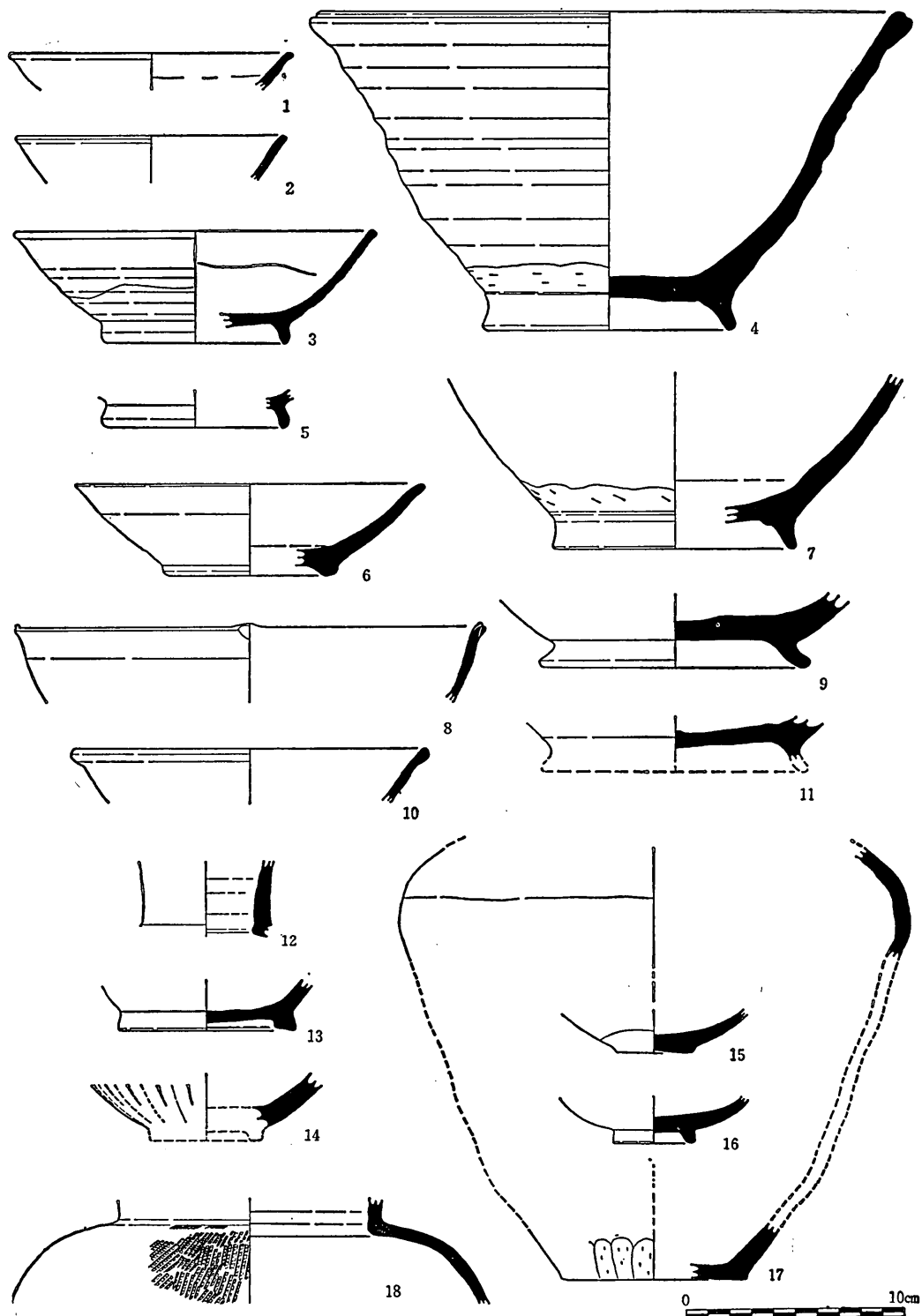
(5~7)は全く釉の施していないが、灰釉陶器に近い類の陶器である。(5, 7)は杯、(6)は輪花碗の一種と思われる。

(8~13)は無釉で中世前半期に位置づけられる陶器と思われる。(8)は口縁径27.5cm、高さ14.4cmを計り、鉢型を呈する。外面はロクロ成形、内面は横位ナデで仕上げてある。底部の上はケズリ、下部はロクロナデである。(9)は内面にわずかに自然釉がみられ、内・外面ともにロクロ成形を成す。底上部はケズリ、下部はロクロナデ。(10)は底部破片であり、内面はロクロナデ、外面の上部はケズリ、下部はロクロナデを呈す。(11)は大般(10)の状態では同様であった。(13)の状態は(10~11)と同じようであったが、内面に自然釉がわずかにみられた。

(14)は中世中期頃の灰釉陶器の小型皿と思われる。釉は内・外面ともにみられ、内面のは一部分剝落している。

(15)は室町中期頃の鉄釉茶碗の底部破片である。(16)は常滑焼の甕であり、自然釉とハケ目より、底部はケズリによって全体を成している。(17)は第1号土壙より出土した青磁碗の底部破片であり、釉の厚さからして宋の青碗と思われる。(18)は須恵器短頸壺の口縁部破片であり、口縁部の外面はロクロナデ、その下はタタキ目をつけてある。

(飯塚政美)



第6图 陶磁器実測図1~15, 17 (1:3), 16, 18 (1:6)

第2節 石 器

第7図(1～5)は第1号溝状遺構より、(6～8)は遺構外より出土した石器である。

(1～3)は砥石であり、(1～2)は中研砥、(3)は仕上げ砥の形態を成している。(1)は三面が砥石面として利用されており、表面には砥ぎ痕が明瞭である。破損して後縁部がつぶれている。石材は細粒砂岩を利用している。

(2)は上端・下端は欠損しているが、わずかにかけたりした部分を除いて、五角形状に近い。周縁は砥面に利用されている。砥石の使用痕及び、良好に磨かれた面には石の節理がよくみえている。石材は細粒砂岩を用いている。

(3)は下端部は欠損しているが、小型でよく整形された砥石である。本砥石の極だった特徴としては極端に扁平な断面を呈していることである。砥石痕は仕上げ砥という機能からして、わずかに認めるだけである。石材は粘板岩を利用している。

(4)は下部が開き撥形を呈する打製石斧であり、欠損部はどこにも見当たらない。刃部両側縁、下縁部に集中し、上縁には存在しない。中央部に自然面を残す。緑泥岩を利用。

(5)は撥形の打製石斧であり、完型の状態で出土した。刃部は両側縁と、下縁部に集中している傾向である。中央部全面にわたって自然面を残す。緑泥岩を利用、側面は扁平状を呈す。

(6)は上・下端両面は欠損している乳棒の磨製石斧である。上部の頂の破損は新しい。上部両側縁には敲打痕が残っている。中央部付近は破損後、調整してある。緑泥片岩を利用。

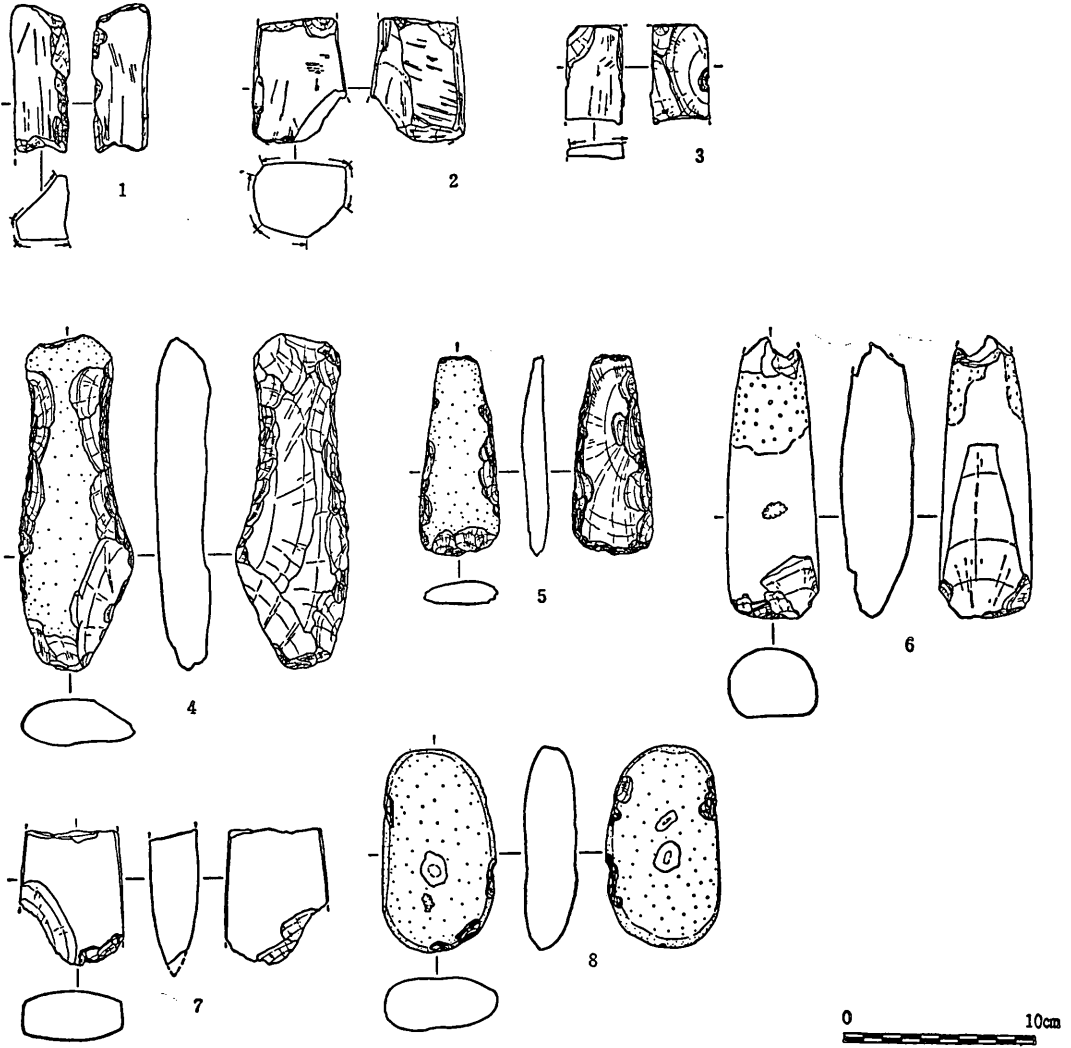
(7)は上、下端、左側縁下部を欠損している定角式磨製石斧である。現存している部分から想定して刃部は鋭利になると思われる。石質は石英粒の入る砂岩を利用している。

(8)は緑泥片岩を利用し、片面に1孔、片面に2孔を作った凹石であり、その凹み度は一般的に浅くなっている。

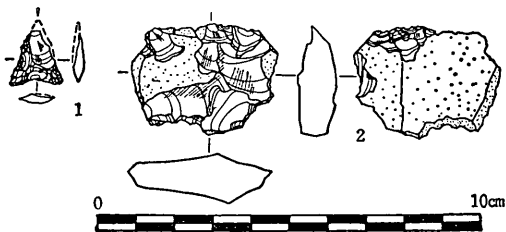
第8図(1)は黒耀石製の石鏃であり、先端部をわずかに欠損している。(2)は黒耀石製ノッチの着いたスクレーパーである。刃部は下端の一部に作り出されているだけである。

(飯塚政美)

第IV章 遺 物



第7图 石器实测图(1~5)第1号薄状遗物出土(6~8)遗物外出土



第8图 石器实测图

第V章 まとめ

今回の調査も幅5mと限られていた用地のために、期待していた程の成果はあがらなかった。

遺構としては、南北1m、東西1m20cm程で長楕円形を呈する土壇が砂礫土層面中より掘り込まれて構築されている。遺構内からの遺物の出土は何もなかったが、遺構の南壁近くより青磁碗の破片が出土している。

溝状遺構は東西が限られている用地のために長さは不確定であったが、幅は広いところで4m～5m、狭い所で3m位を測っていた。

溝底から鎌倉後期古瀬戸灰釉スリ鉢、古瀬戸灰釉鉢、常滑焼甕、室町中期頃古瀬戸鉄釉茶碗、砥石等々の破片が相当量出土している。本遺跡地の東側500m位の所に小井亘氏の居城と伝承されている小出城がある。小井亘氏は工藤氏の流れを引く一豪族で、鎌倉初期に小出の地頭職に任ぜられ、以後、子孫はこの地で繁栄を極め、室町中期頃に諏訪へ移住したと古記録に書かれている。従って、今回の発掘調査によって出土した陶磁器も、時期的にみて小井亘氏の動向と同じくしている。出土陶磁器片の質からみて、付近に小井亘一族の居館が存在したものと類推できよう。

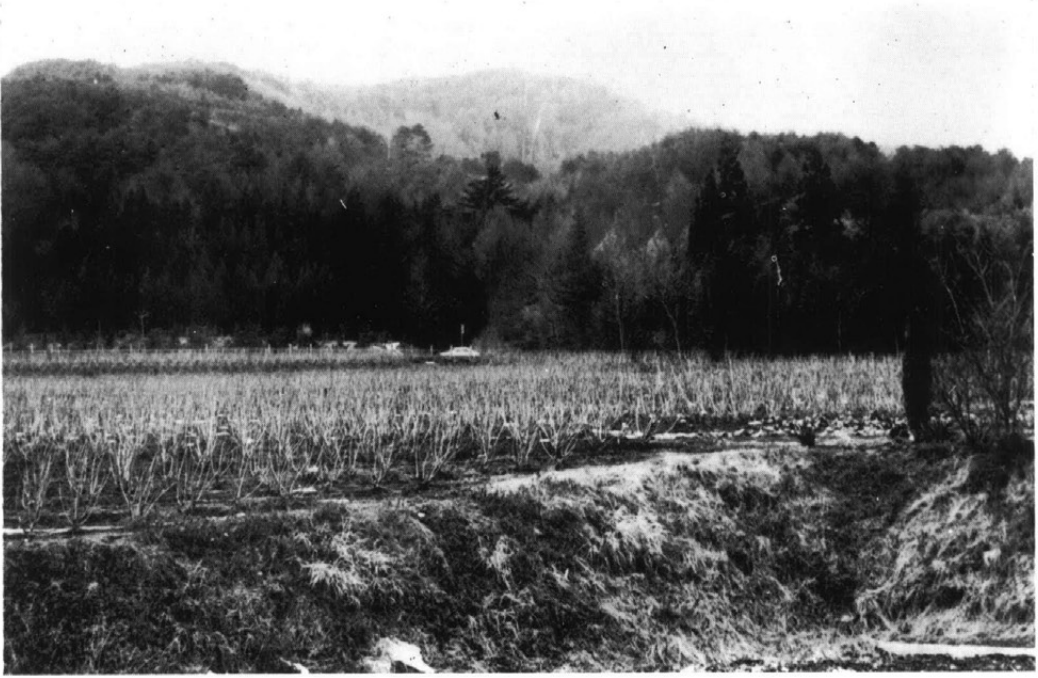
出土した縄文土器の編年を述べてみると次のようになる。第5図(1～2)は茅山系統、(3)は中期初頭、(4)は勝坂式、(5)は加曾利E式、(6)は堀の内式、(7～8)は加曾利B式、(9)は大洞系統、(10)は東海地方の樫王、五貫森系統と思われる。

石器は砥石、打製石斧、磨製石斧(乳棒状、定角式)、凹石が出土している。砥石は全て中世に属していると思われる。

黒耀石製の石器として、石鏃、スクレーパーが出土している。

(飯塚政美)

图 版



遺跡地の東側より眺む



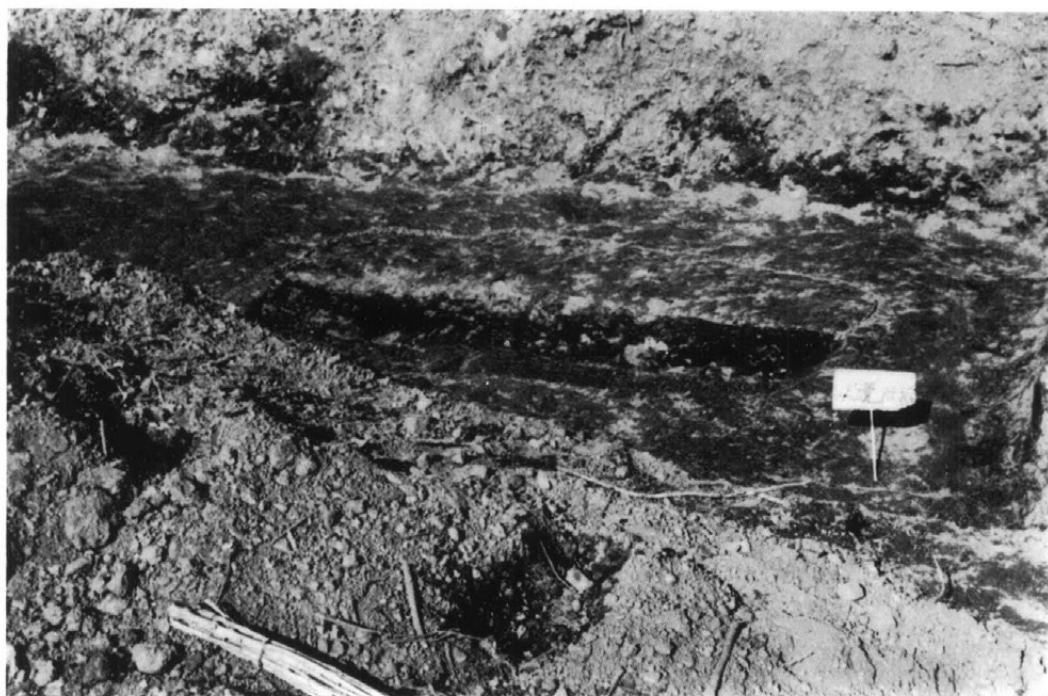
遺跡地の最北端地区発掘調査終了（グリット掘り）



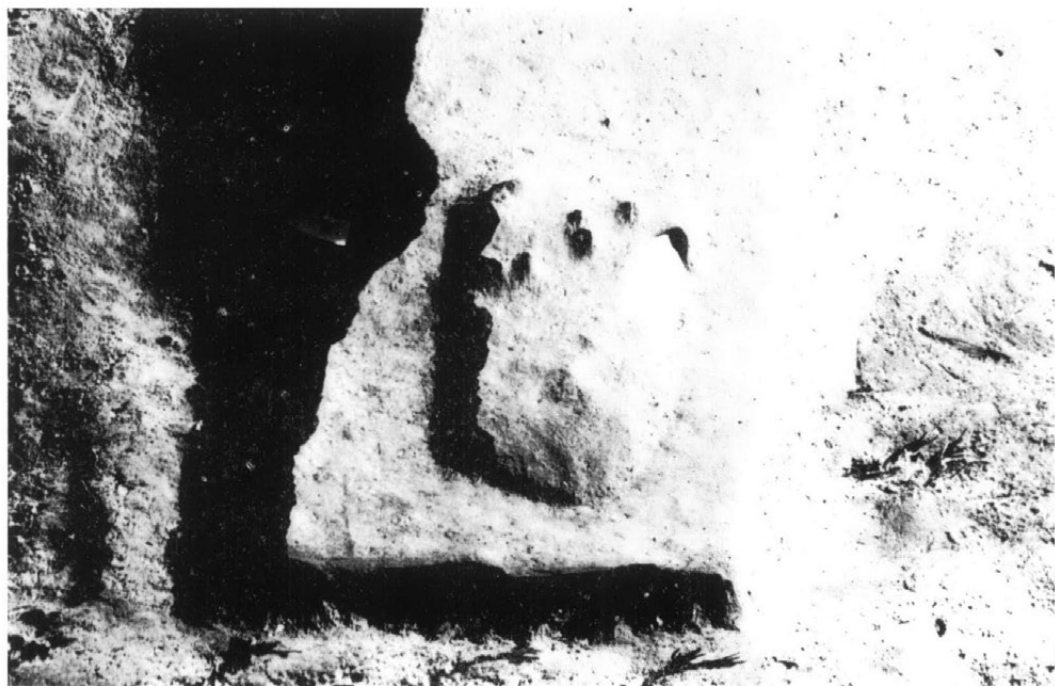
遺跡地の中・南端地区発掘調査終了（グリット掘り）



工事実施中の遺跡地



第 1 号土城断面



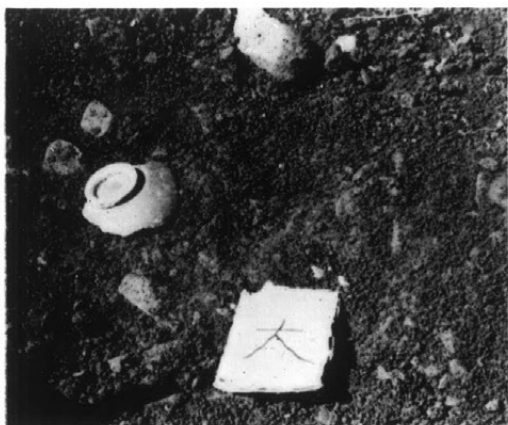
第 1 号土城



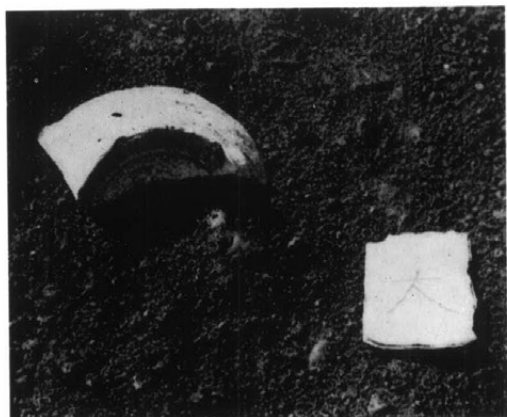
第1号溝状遺構



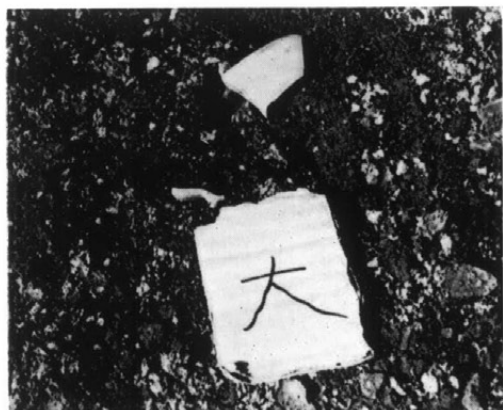
テント設置



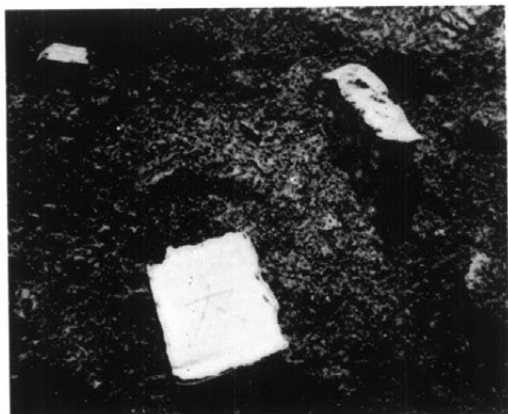
陶器出土状況



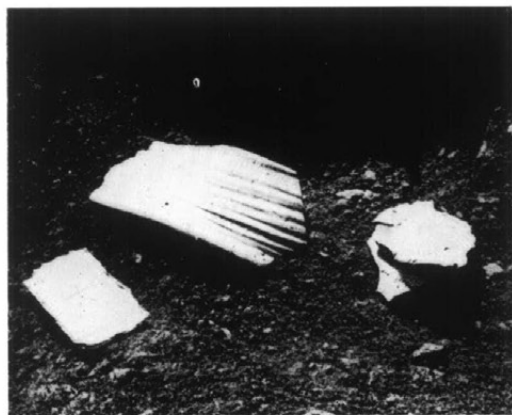
陶器出土状況



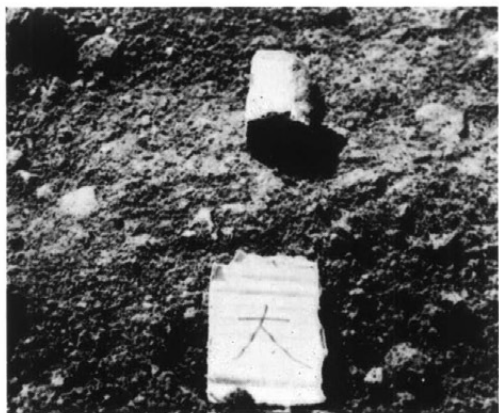
陶器出土状況



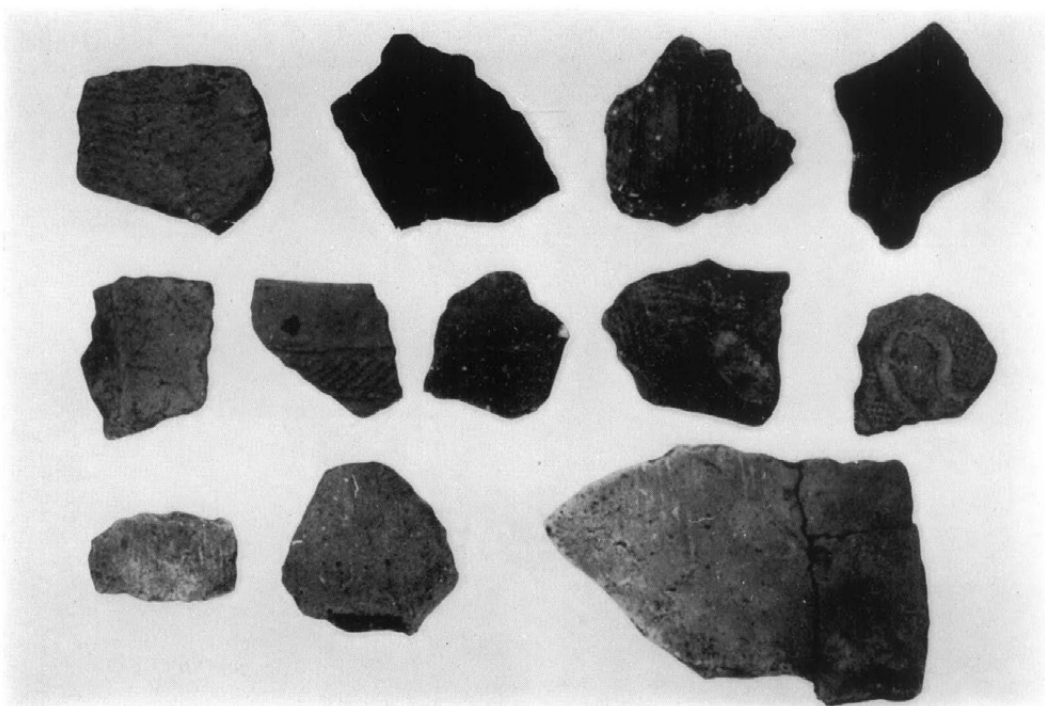
石器出土状況



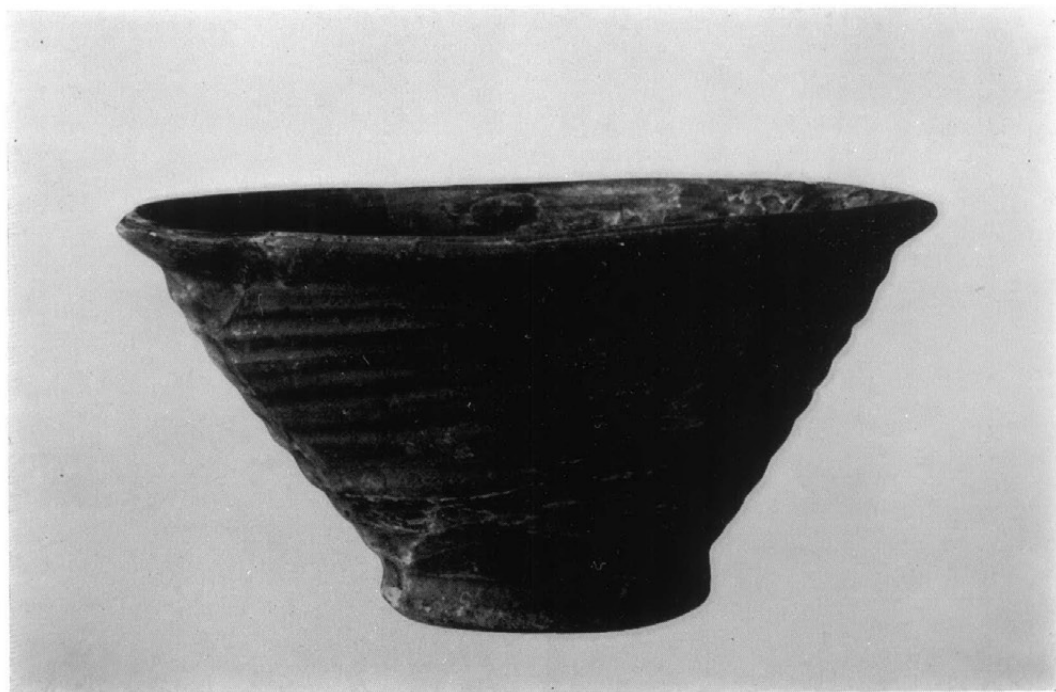
陶器出土状況



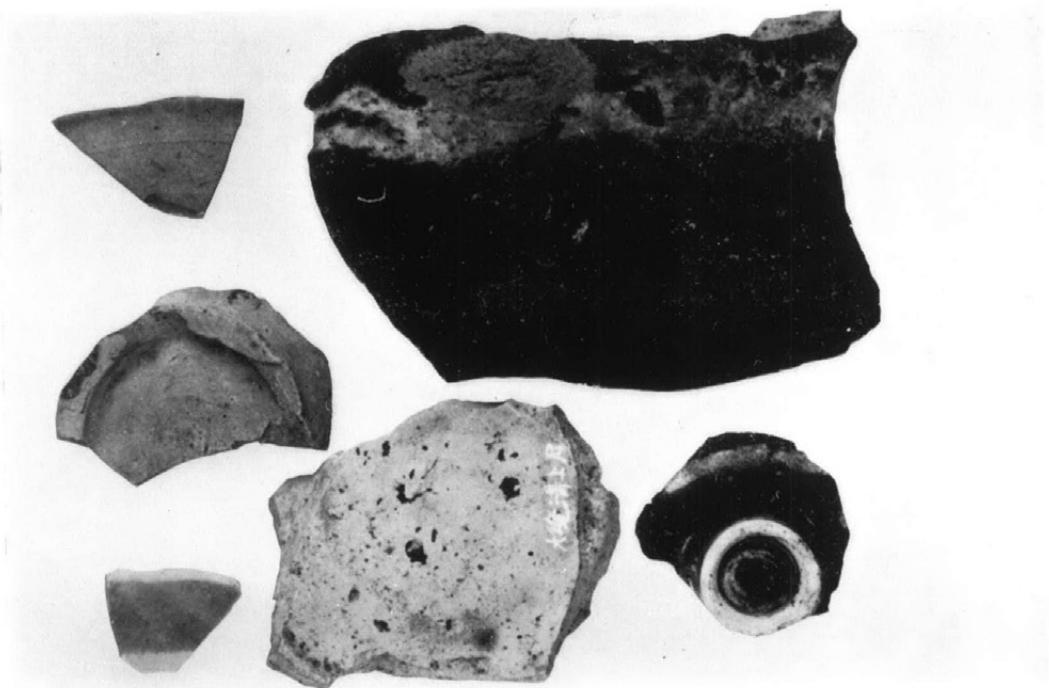
石器出土状況



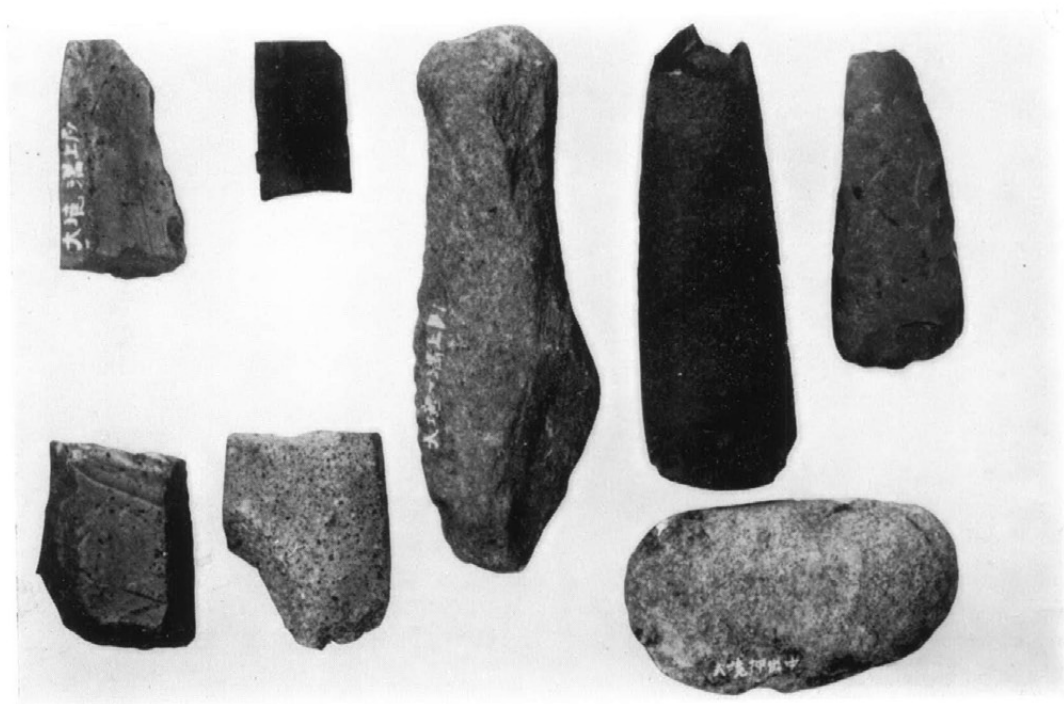
出土土器



出土陶磁



出土陶磁器



出土石器

中原遺跡

目 次

目 次	(3)
挿図目次	(4)
図版目次	(4)
第 I 章 発掘調査の経過	(5)
第 1 節 発掘調査の経緯	(5)
第 2 節 調査の組織	(5)
第 3 節 発掘日誌	(6)
第 II 章 層 位	(9)
第 1 節 発掘地区内の地層	(9)
第 III 章 遺 構	(9)
第 1 節 住 居 址	(9)
(1) 第 1 号住居址	(9)
(2) 第 2 号住居址	(13)
第 IV 章 遺 物	(14)
第 1 節 土 器	(14)
第 2 節 石 器	(17)
第 3 節 土 製 品	(20)
第 V 章 ま と め	(22)

挿 図 目 次

第1図	土層模式図	(9)
第2図	地形及び遺構配置図	(11)
第3図	第1号住居址及び同住居址炉址実測図	(10)
第4図	第2号住居址及び同住居址埋甕炉実測図	(13)
第5図	土器実測図(第1号住居址)	(14)
第6図	土器拓影	(15)
第7図	土器実測図(第2号住居址)	(15)
第8図	土器拓影	(17)
第9図	石器実測図(1号住居址)	(18)
第10図	石器実測図	(20)
第11図	土製品実測図	(21)

図 版 目 次

図版1	遺跡全景
図版2	遺跡全景
図版3	遺 構
図版4	遺 構
図版5	遺物出土状況
図版6	遺物出土状況
図版7	出土遺物
図版8	出土遺物
図版9	出土遺物
図版10	出土遺物

第I章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として、竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに付設する計画が実施されて徐々に工事が進ちょくしている。伊那市においては、西箕輪・西春近・伊那地区がこれに該当し、昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡。昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡、金鑄場遺跡。昭和54年度に西箕輪上戸宮垣外遺跡、西箕輪中条天庄Ⅱ遺跡、小花岡遺跡。昭和55年度に西箕輪吹上桜畑遺跡の調査が行われてきた。昭和57年度は伊那船窪船窪遺跡、西町大坊城畑遺跡、西春近山本城平遺跡、宮林遺跡、山の根遺跡の緊急発掘調査を行った。

本年度は大境遺跡・中原遺跡・細ヶ谷B遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和57年8月31日 長野県教育委員会文化課臼田指導主事が来伊し、伊那市教育委員会社会教育課職員、関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と三者協議を混じえながら予算査定を行う。

昭和58年9月21日 夜、宮の原会所で地権者と打ち合せをする。伊那市教育委員会職員と関東農政局伊那西部農業水利事業所職員が出席する。

昭和58年9月30日 伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

昭和58年10月1日 関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と伊那市教育委員会社会教育課職員立合いのもとに発掘調査地区に境界用のテープを張る。

昭和58年10月14日 伊那市教育委員会社会教育課職員が中原遺跡に該当する地権者宅を訪問し、発掘承諾書に署名、捺印してもらふ。農政局側の負担額は当初は4320,000円であったのを3,120,000円に減額する。

第2節 調査の組織

中原遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊澤 一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福澤 総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽 映土	伊那市教育委員長
調査事務局	三澤 昭吾	伊那市教育委員会教育次長
"	竹松 英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
"	柘植 晃	" " 課長補佐
"	武田 則昭	" " 係長
"	高木 いずみ	" " 主事

第I章 発掘調査の経過

発掘調査団

団 長	友 野 良 一	日本考古学協会会員
副 団 長	根 津 清 志	長野県考古学会会員
”	御 子 柴 泰 正	”
調 査 員	福 沢 幸 一	”
”	飯 塚 政 美	日本考古学協会会員
”	小 池 孝	”

第3節 発掘日誌

昭和58年10月31日 晴 大境遺跡のテントを建てた場所から中原遺跡へテントを運搬し、道具の整備をする。

昭和58年11月1日 晴 中原遺跡へテントを建てる。テントの建て場所はヨドガ沢に面した場所であり、この場所は中原遺跡では北端に位置している。

昭和58年11月2日 晴 グリットを設定する。グリットの名称はヨドガ沢に面した方を基点にし、北から南へ1～15、東から西へA～Cと決める。1辺を2m×2mとし、面積4㎡を1グリットと定める。

昭和58年11月4日 晴 A1より掘り始める。この地点には多量の土器片が出土した。その出土状況は流石の間より出土しており、どうも流れた可能性が強かった。土器片のなかには縄文晩期のものも少し見られた。

昭和58年11月5日 晴 昨日、多量に土器片の出土した付近を拡張し、徐々に下げていく。本日も相当量の土器片が出土したが、遺構らしきものは何も発見されなかった。

昭和58年11月7日 晴 拡張したグリット部分を一応礫層面まで掘り下げてみるが、遺構の可能性は全くなかった。地層が下へ行く程、土器片が丸くなっており、明らかに上からの流れによる土器片であると判明した。

昭和58年11月8日



発掘状況

晴 A9付近に落ち込みがみられ、住居址と判明し、これを第1号住居址、第2号住居址とする。プランを確認するために付近を拡張するこの二軒の住居址の東側は用地外の方へ出ているので西半分だけの調査となった。

昭和58年11月9日
晴 前日、検出された二軒の住居址の南側のグリットを市松状に掘り下げていくと、縄文中期、田戸下層式、縄文後、晩期の土器片が出土した。



住居址の発掘調査

昭和58年11月10日 晴時々曇・雨 第1号住居址、第2号住居址の掘り下げをはじめ。

昭和58年11月11日 晴 第1号住居址、第2号住居址の全ぼうが明らかとなってきた。それによると、第1号住居址は円形状の、第2号住居址は方形の堅穴住居址であった。第1号住居址は縄文中期の住居址であることが判明した。中期の住居址にしては土器の出土量は少なかった。土器の出土量に比して石錘の出土数は多かった。このことは付近の小河川に多量の魚が生息していたことを裏付けてくれる。

昭和58年11月12日 雨時々曇 本日は雨が降ったり、やんだりで一日中寒い日であった。このような状況であったので発掘器材の中間整備をした。

昭和58年11月14日 晴 第1号住居址、第2号住居址の実掘を実施する。この状態からして第1号住居址は北側で第2号住居址に切られている、第2号住居址は埋甕炉を有する弥生後期の住居址となった。

昭和58年11月15日 晴 本日は道をへだてた南側にグリットを設定する。この所をⅡ区とし、グリット名のつけ方は東側を基点とし、東から西へA～C、北から南へ1～13と決め、1辺を2m×2mとする。A1より市松状に掘り進めていく。土器片の出土量は少なかったのに反し石錘の出土が割合に目立った。途中に極めて堅い面が約2m幅にわたって発見されたが付近を拡張して精査してみるに、どうも山道のようなようであった。

昭和58年11月16日 晴 本日は前日同様にⅡ区を南へ掘り進めていく。

昭和58年11月17日 雨時々晴 午前中は雨降りのために道具や図面の整理を行う。午後はやや晴れてきたのでⅡ区を南へ掘り進めていく。

第I章 発掘調査の経過

昭和58年11月18日 雪時々曇 本日は初雪があり、寒い一日であった。昨日同様に、Ⅱ区を南面にある沢の北端近くまで掘り進めていくと、石錘の出土は多かった。土器はまばらな出土をし、しかも丸味を呈していた点からしてどうも上からの流れのようであった。ローム層まで深い所で1m位あった。

昭和58年11月19日 晴 中原遺跡の最南端付近のグリット掘りを実施してみると土器片は相当量出土したが、遺構は何も検出されなかった。土器片の状況からして多分流れの様子が強く、従って遺構を用地外の西側に存在するものと思われる。

昭和58年11月21日 晴 第1号住居址と第2号住居址の清掃をし、写真撮影する。

昭和58年11月22日 晴 中原遺跡の地層図と第1号住居址、第2号住居址の実測をする。地層図がよくとれるように作業員で断面を丁寧に削る。

昭和58年11月24日 雨時々晴 明日、発掘器材を細ヶ谷B遺跡へ運搬するので、道具を選びやすく一まとめにしておく。

昭和58年11月25日 晴 中原遺跡の全測図を作製する。細ヶ谷B遺跡へ発掘器材を運搬する。

昭和59年2月～3月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集。 (飯塚政美)

昭和59年3月 報告書を刊行する。

作業員名簿

酒井岩夫、北原一喜、池上大二、埋橋程三、大野田英、唐木由人、唐木淳、酒井とし子、城倉芳美、城倉すみ子、大野田三千代、網野実子、有賀文子、橋爪ちえ子、柴佐一郎、三沢寛、建石紀美子 (敬称略順不同)

第Ⅱ章 層 位

第1節 発掘地区内の地層

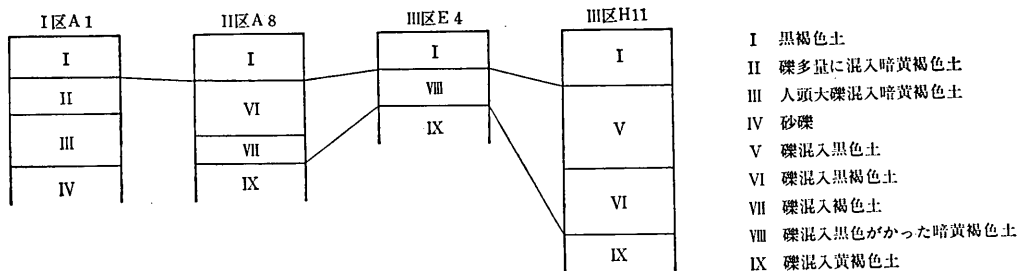
本調査地は南北に細長く、しかも幅が限定されていたので、グリットを設定するときに適切に行かないので、区ごとに分けてグリットを設定する。従って、このグリットに基づいて発掘調査を実施した。

本遺跡地の最北端部、ヨドガ沢の支流に面した地点をⅠ区と決める。従って、この沢によって運搬されてきた礫層が累々と堆積していた。

Ⅱ区は本遺跡地の中央部付近に該当し、この一帯は地層が割合に安定しており、礫混入が割合に下層にみられた。

Ⅲ区はヨドガ沢を南側にのぞむ河岸段丘の突端部、本遺跡地の最南端部にあたっている。地層の状況は第1図土層模式図のようである。

これらⅢ地区の模式地層を上から層序順に記すと次のようになる。黒褐色土、礫多量に混入暗黄褐色土、人頭大礫混入暗黄褐色土、砂礫、礫混入黒色土、礫混入黒褐色土、礫混入褐色土、礫混入黒色がかった暗黄褐色土、礫混入黄褐色土



第1図 土層模式図

第Ⅲ章 遺 構

第1節 住居址

(1) 第1号住居址(第3図, 図版3)

本址は第Ⅰ区の中央部付近、グリットで言うならばA8～A10付近に検出され、東側は用地外の為に発掘調査はできなかった。表土面より50cm位下った土層を掘り込んで構築された竪穴住居地である。その平面プランは北側で第2号住居址に切られてしまって不明ではあるが、現存するプランから察して円形状と思われる。

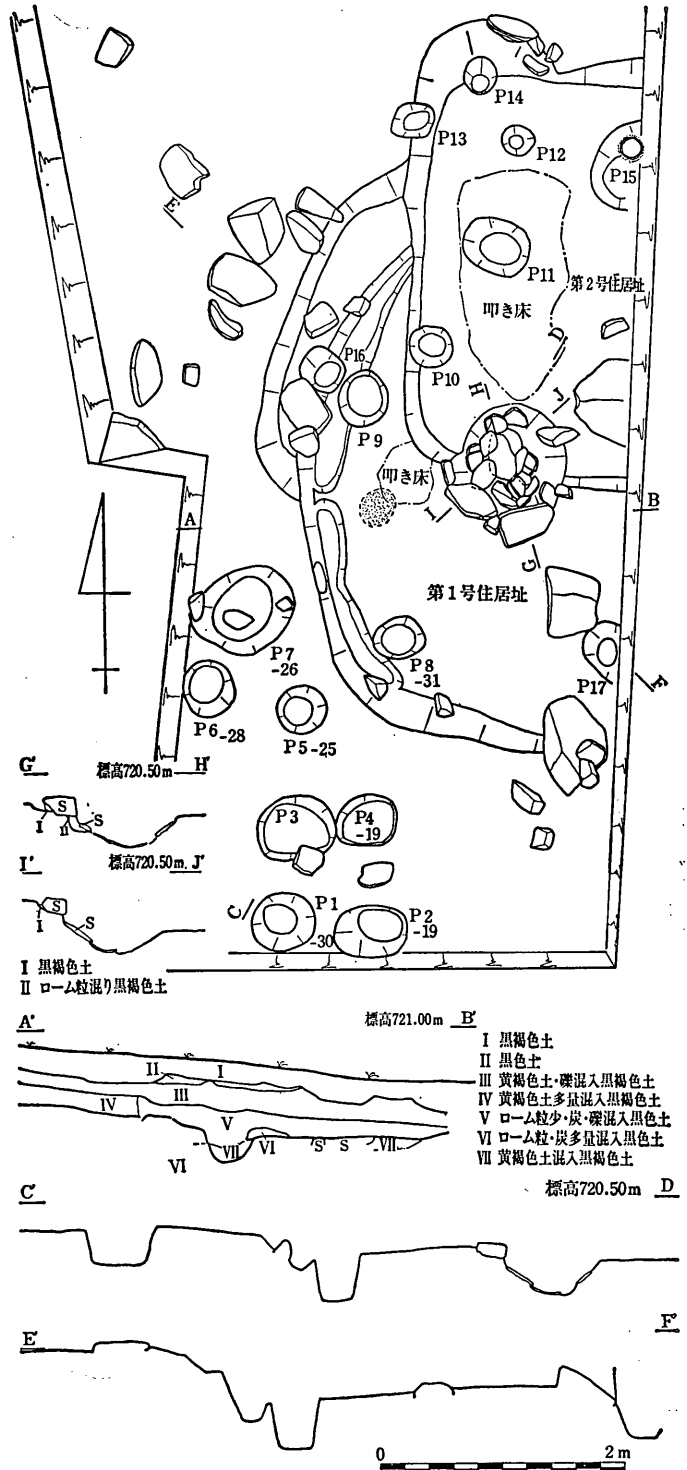
第三章 遺 構

規模は推定直径 4 m 50cm前後を計る。壁高は30cm位を計り、住居址掘り込み面自体が礫混じりの土質のために壁面もゴツゴツしており、石が露出していた。石はホルンヘルス質のものが大部分であった。ホルンヘルスは本中原遺跡周辺に産することで有名である。床面は壁同様、礫の多い地層面に構築され、堅い面と、軟弱な面とが歴然としており、そのレベル差はやや大き目であった。同面の西壁直下に周溝が回っていた。

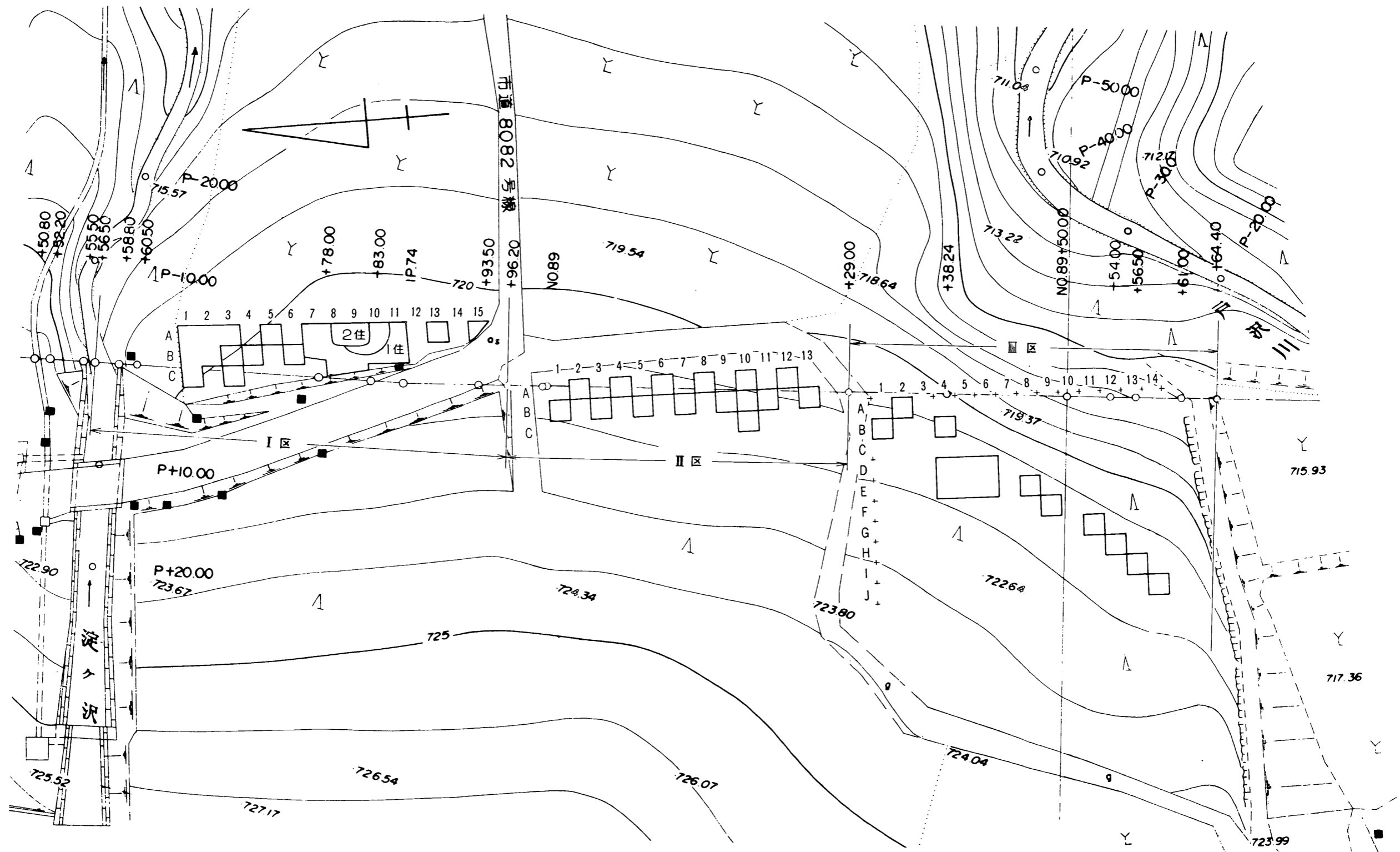
炉は円形状の石囲炉であり、その規模は南北1 m 15cm, 東西1 m位を測る。現存している炉縁石は南側だけに限られているが、かつては北側にも存していたことと思われる。炉底はすりばち状を呈していた。炉石には赤く焼けたのが多く認められた。

炉の構築方法は次のようであった。最上層の炉石の下にホルンヘルスの炉石を同心円状に敷き、その下部に土器を敷きつめてある。炉底の最深部に土器の底部を上向きにして置いてある。湿気を防ぐための一工夫であろうが、その組み方は見事であった。

主柱穴は現存の柱穴の直径が小さいことから8本と思われる。その深さは30cm位である。



第3図 第1号住居址及び同居居址炉址実測図



第2図 地形及び遺構配置図 (1:400)



炉壁及び炉底に敷きつめてあった土器は加曾利E式であり、よって本址もその時期であろう。

(2) 第2号住居址(第4図, 図版3~4)

本址は南側で第1号住居址を切り込んで構築し、礫混じりの土層を掘り込んでつくられ堅穴状の住居址である。東側は第1号住居址同様用地外のために発掘調査は不可能であった。推定するに隅丸形状の平面プランを呈し、その規模は一辺が3 m70cm~3 m80cmくらいだろう。

壁高は20~30cm位を計り、外傾気味で、壁面に細礫が露出していた。

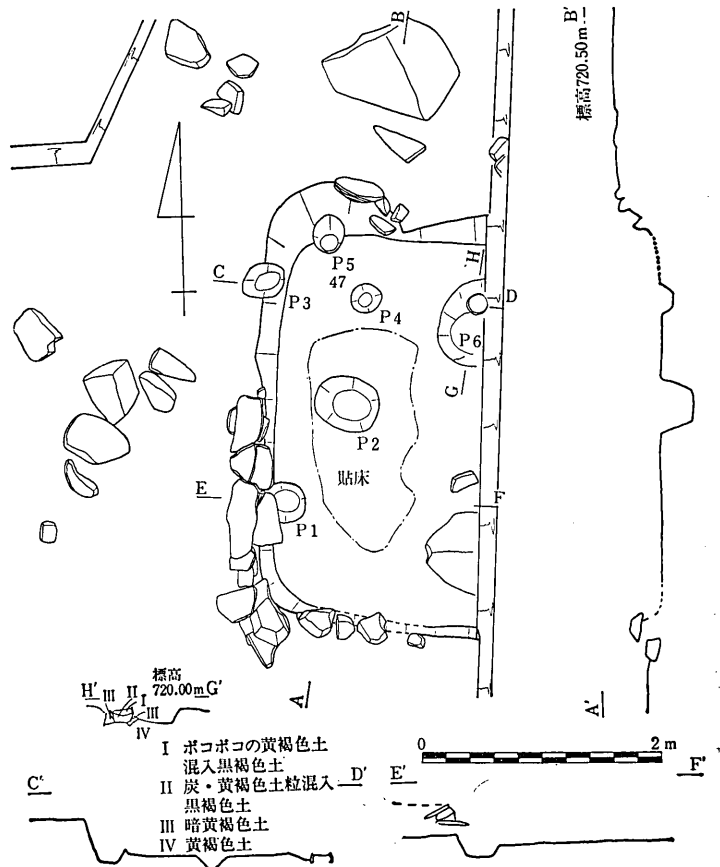
床面は大体水平であり、堅くなっていたが、特に、同面の西壁によった中央部付近には部分的に貼り床が存在していた。

西壁の南半分的位置にホルンヘルスの板状の石を二段位に整然としきつめてあった。この石の大きさは人頭大から一抱え大程であった。これらの石は西側の壁の役目を担っており、土留め用を置いたのである。

北壁の近く、しかも東側用地境界線上にP₆があり、この北壁に密着して正位の埋甕が発見された。付近が若干焼けており、おそらく埋甕炉に使用されたのであろう。この土器は下半部は欠損しており、一般的にみられる埋甕炉と大差はなかった。

主柱穴は発掘調査時で確認されたのから察して4本主柱穴となり、壁面に補助穴がつくと思われる。補助穴の本数は現段階では不明である。

本住居址の覆土は上からボコボコの黄褐色土混入褐色土、炭・黄褐色土粒混入黒褐色土、暗黄褐色土、黄褐色土の順に堆積していた。遺物については前述した埋甕炉に使用した土器以外は何も出土しなかったが、この土器からして本住居址は弥生時代後期終末に位置づけられるだろうと思われる。(飯塚政美)



第4図 第2号住居址及び同住居址埋甕炉実測図

第IV章 遺 物

第1節 土 器

第1号住居址出土土器

第5図に登載されている土器は第1号住居址炉底に敷かれていたものである。口縁径は45cm位、最大胴は45cm位をそれぞれ測る。口縁部は外反し、口縁下部から胴部上部にかけてややつぼまり、さらに胴中央部付近で広がり、それから底部にかけてややつぼまり気味を呈すると思われる。

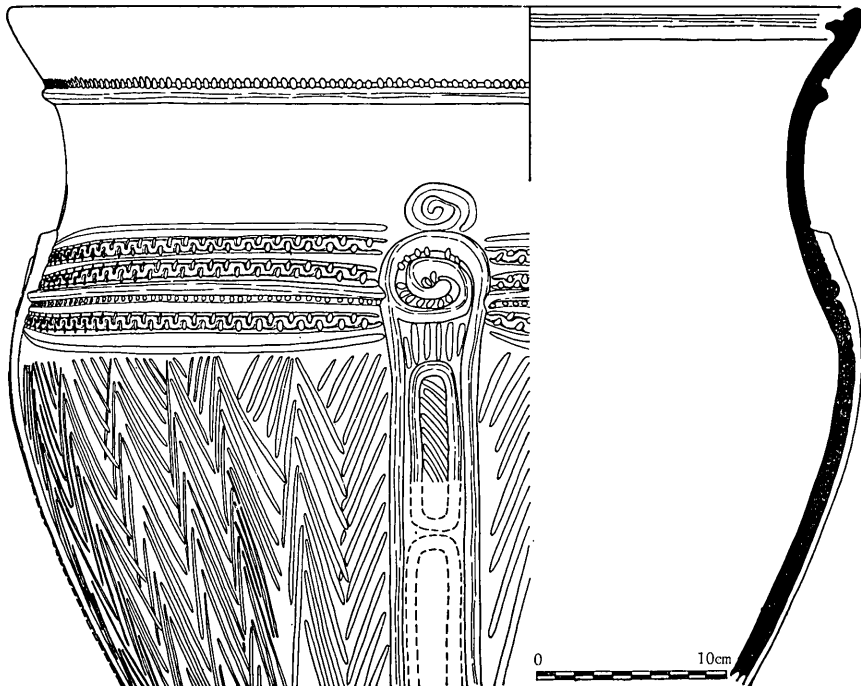
この土器の文様を部分的に述べてみる。口唇及び口縁上部は無文部が主体を成し、口頸部には刺突文と数条にわたって横位の沈線を施してある。刺突はやや左上りで、若干幅の差がみられる。

口頸下部から胴上部にかけて無文帯が連なっている。

胴上部の文様帯は隆帯の横位貼り付けと、横位の沈線、刺突のくりかえしによって文様構成がなされている。刺突は右横から行われている。

胴下部から下にかけては幅広ろの沈線を不規則なハの字状に施してある。文様のつける方向は右上から左下、左上から右下とまちまちであった。

土器の中央部付近には隆帯による懸垂文を加飾してあり、その上部結末は渦巻状を呈し、この渦巻文の内側に規則的に刺突文を押捺してある。この懸垂文によって縦長の方形状の区画が構成され、その中に沈線が斜走している。外面は全般的に横位ナデ、内面は全般的に横位ナデ後平滑にし



第5図 土器実測図

である。

赤褐色を呈し、雲母、石英、長石等の鉱物を多量に含み、焼成は不良である。本土器は加曾利E期の土器に含まれると思われる。



第6図 土器拓影

第6図に掲載されている土器片は全て第1号住居址出土のものである。(1)は隆帯が横位や、蛇行状に貼り付けられ、その縁に沿って右上りの刻目をつけてある。破片の右側中央付近から下部にかけて鋭角な沈線が縦走している。明茶褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は良好である。

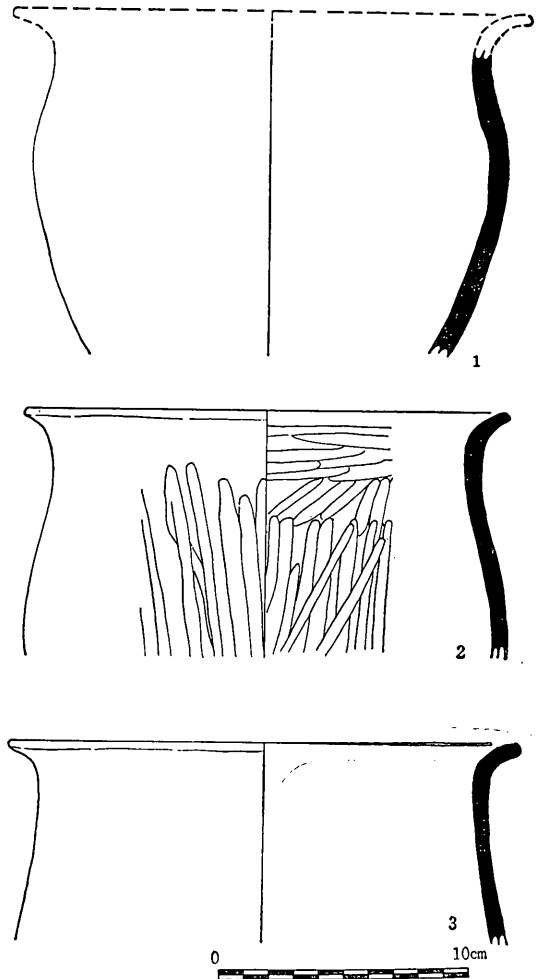
(2)は破片上部は縦位の沈線、中・下部にかけて隆帯を付けてある。赤褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は不良である。

(3~4)は幅広の沈線が数条にわたって垂下している。(3)は明黄褐色、(4)は赤褐色を呈し、焼成は不良(4)、良好(3)であり、両片とも少量の長石を含む。

第2号住居址出土土器

第7図(1~3)は第2号住居址より出土した土器であり、全て、弥生時代最終末期頃に位置づけられると思われる。

(1)は埋甕炉に使用された土器で内側に埋っていたものである。口唇部から口頸部は欠損してしまっているが、現存している部分から想像するに口径20.7cm位を測る。外反した甕型土器である。文様は無文部がその主流を成し、無文の間に外面上部



第7図 土器実測図(第2号住居址)

では横位ナデ、中部で縦位ナデ、下部はススが付着している。内面上部は横位ナデ、中・下部にかけて縦位ナデになっている。明茶褐色を呈し、雲母、石英を含み、焼成は中位である。

(2)は埋甕炉の外側に使用された土器である。口径19.4cmを測り、ゆるやかに外反する甕型土器である。外面は縦位ミガキで黒変している。内面口唇部は横位ナデ、上部は横位ミガキ、中~下部にかけて縦位ミガキである。明茶褐色を呈し、雲母、石英、長石を含み、焼成は良好である。

(3)は口縁が大きく外反し、口径20.5cm位を計る甕型土器である。無文である。外面上部は横位ナデ、中~下部にかけて軽い縦位ミガキ、内面は斜位ミガキである。色調は明黄褐色を呈し、雲

第IV章 遺 物

母，石英，長石を含み，焼成は普通である。

遺構外出土土器

第8図(1～3)は胎土中に多量の繊維を含んだ一派である。(1)は破片上部に沈線を交互状につけてあり，下部は沈線が不規則に横走している。(2)は沈線文を幾何学的に区画してある。(3)は横位の貝殻条痕文がみられる。(4)は外面は太目の縄文，内面に貝殻条痕文が横走している。胎土中に少量の雲母を含み，明茶褐色を呈す。

(5～8)は縄文中期後葉に位置づけられている土器片である。個々の破片についてその文様を述べてみよう。(5)は渦巻文を，(6，8)は縦位の沈線文を，(7)は縄文地に沈線文をそれぞれつけてある。(5)は明茶褐色，(6)は赤褐色，(7)は黒褐色，(8)は明白灰色を呈す。焼成は一般的に普通であった。

(9～10)は弧状の磨消縄文がみられる土器片である。(9～10)はともに明茶褐色を呈し，焼成は良好である。(11，14)は小さな円形の突起を貼り付けてある。(11)は赤褐色，(14)は明黒褐色を呈す。(12)は無文地に8の字状の沈線を付加してある。明白灰色を呈し，焼成は良好である。(13)は口唇から口頸部にかけて低い隆帯を縦位にほぼ等間隔に貼り付け，その上に横位に刻目をつけてある。口頸部に大きい隆帯が横位に走る。黒褐色を呈し，少量の長石や雲母を含み，焼成は普通である。

(15)は磨消が横位や弧状につけられている。明黄褐色を呈し，焼成は普通である。(16～19)は磨消が一般的に横位に走っており，いわば加曾利B式の一派に含まれているものと思われる。(16，19)は黒褐色を，(17)は赤白褐色，(18)は赤茶褐色を呈する。(16)は少量の雲母，(17～19)は少量の雲母と長石を含んでいる。焼成は全て良好である。

(20)は口唇部が若干丸味状を呈し，わずかに外反する口縁部破片である。上部に断面丸味状の低い隆帯を横位に貼り付け，下部には細い沈線を無数に施してある。黒褐色を呈し，わずかに雲母を含み，焼成は良好である。

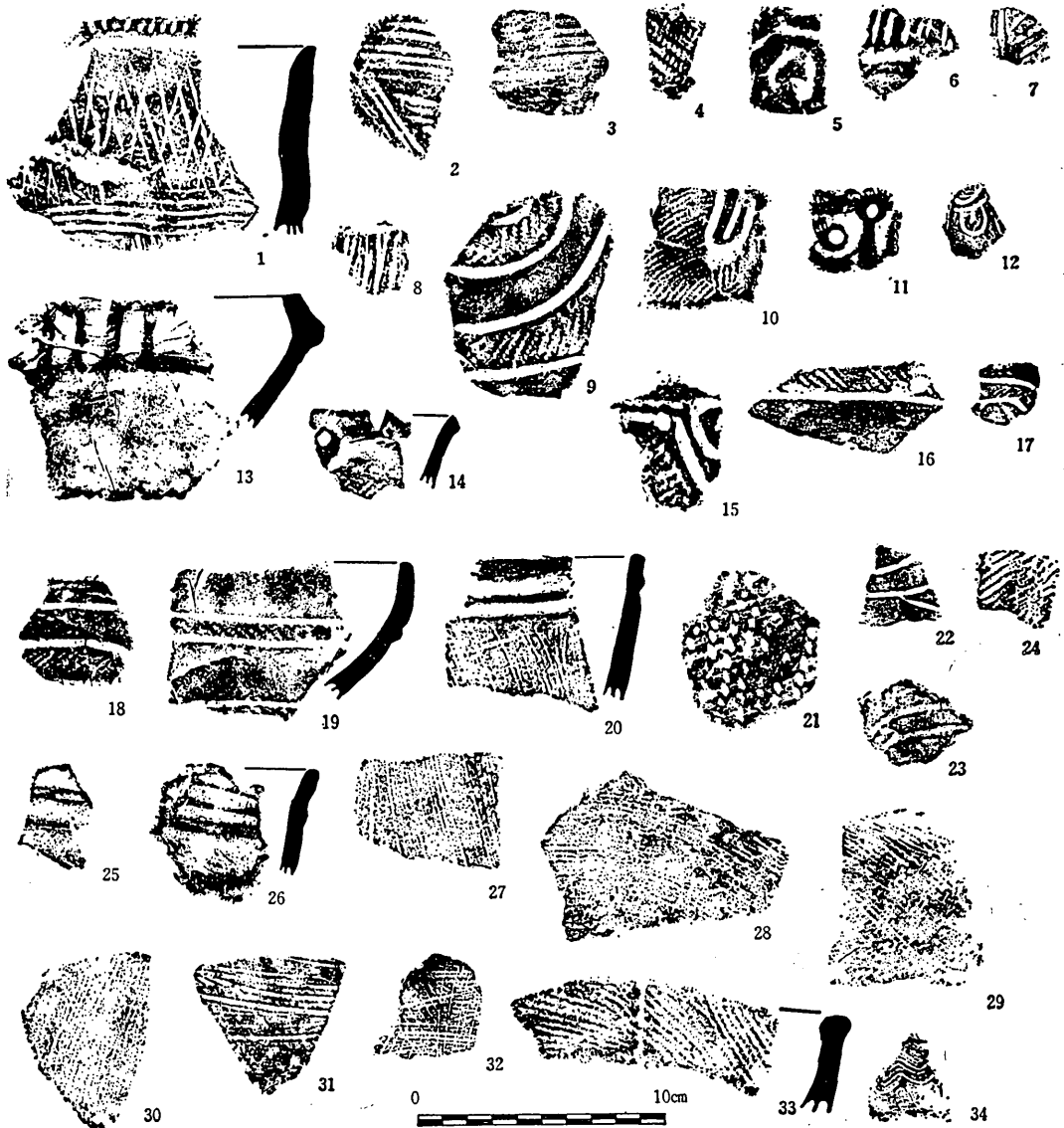
(21)は網代のついた底部破片である。網代目は一般的に荒い編目になっている。明茶褐色を呈し，多量の長石，石英，雲母を含み，焼成は普通である。(22～23)は無文地に若干カーブ状の沈線が描かれている。この二つの破片は厚さ5mm程を測り，焼成は極めて良好である。いわば精製土器の一派に含まれる。

(25～26)は無文地に幅広ろで，浅い沈線が横走し，縄文晩期前半に位置づけられている土器の一派である。(25)は赤褐色を呈し，少量の長石を含み，焼成は不良である。(26)は明黄褐色を呈し，焼成は良好である。

(27～33)は縄文晩期後半の条痕文土器の一派である。(27～29)は黒褐色を呈し，外面に3片ともススが附着している。(30～31)は明茶褐色，(32～33)は赤褐色をそれぞれ呈している。一般的に少量の長石と雲母を含んでおり，焼成は良好である。

(34)は櫛描波状文が横位に波長が長く施され，これは弥生後期に属している。赤褐色を呈し，少量の長石を含み，焼成は良好である。

(飯塚政美)



第8図 土器拓影

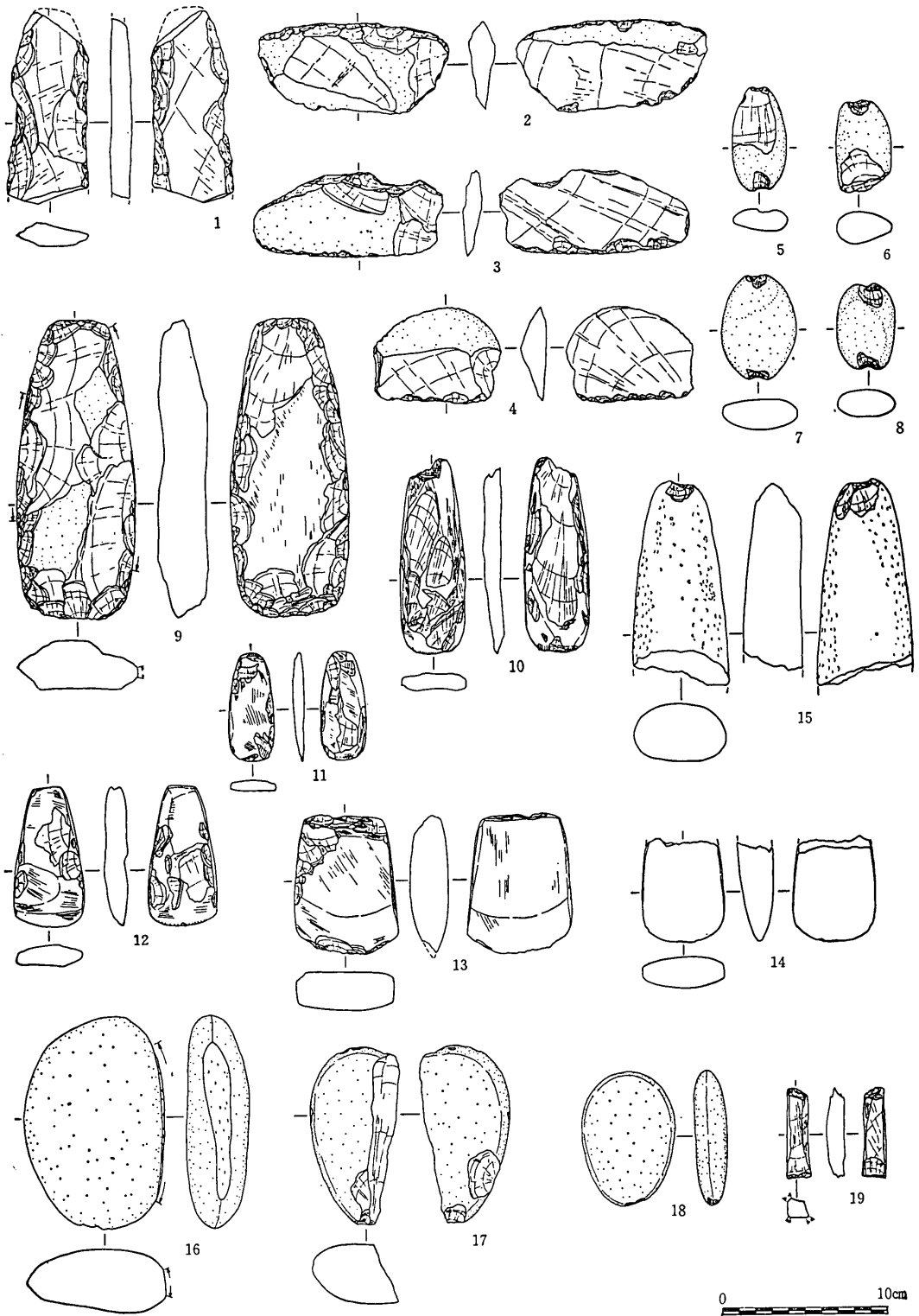
第2節 石 器

第1号住居址出土石器

第9図(1~19)は全て第1号住居址から出土した石器である。(1)は上端, 下端が欠損しているため, その形態は不明であるが, 現存している器型からみて短冊形に近いのになると思われる。両側縁に調整が丁寧である。

(2~4)は横刃型石器であり, 刃部が一部分に加えられている。剝離面は小さく, 断面はとがり気味である。石質は3個とも硬砂岩を利用している。

(飯塚政美)



第9图 石器实测图(第1号住居址)

(5～8)は石錘である。上・下端に凹みをつけてある。石の大きさはごく一般的であり、付近の河川で利用されたと推測できよう。石質は全て硬砂岩である。

(9～15)は磨製石斧であり、これらを細分してみると次のようになる。(9)は撥形を呈し、部分的に磨いた個所が存在している。(10～14)は定角磨製石斧であり、(11)は特に小型となっている。(15)は乳棒状の形態を有している。(9)は緑色片岩、(10～12, 15)は緑泥岩、(13～14)は蛇紋岩を用いている。

(16～18)は磨石である。全て硬砂岩を利用している。(19)は形態不明の石器であり、部分的に磨き痕を認める。緑泥岩製である。

遺構外出土石器

第10図(1～20)は遺構外から出土した石器である。(1～2)は打製石斧である。(1)は下部がわずかに開く撥形状を呈し、刃部は上部以外の下部及び両側縁に集中し、その調整は丁寧である。硬砂岩を使用。(2)は上・下部は欠損し、現存している両側縁はよく剝離痕が残存している。硬砂岩を使用。

(3～5)は硬砂岩を利用した横刃型石器である。形態は楕円形状(3～4)、三角形状(5)に区別される。断面は(3～4)は比較的薄く、よく類似している。(4)は分厚くなっている。従って、(3～4)の刃部は鋭角を呈しているのに対し、(5)は鈍角に近くなっている。

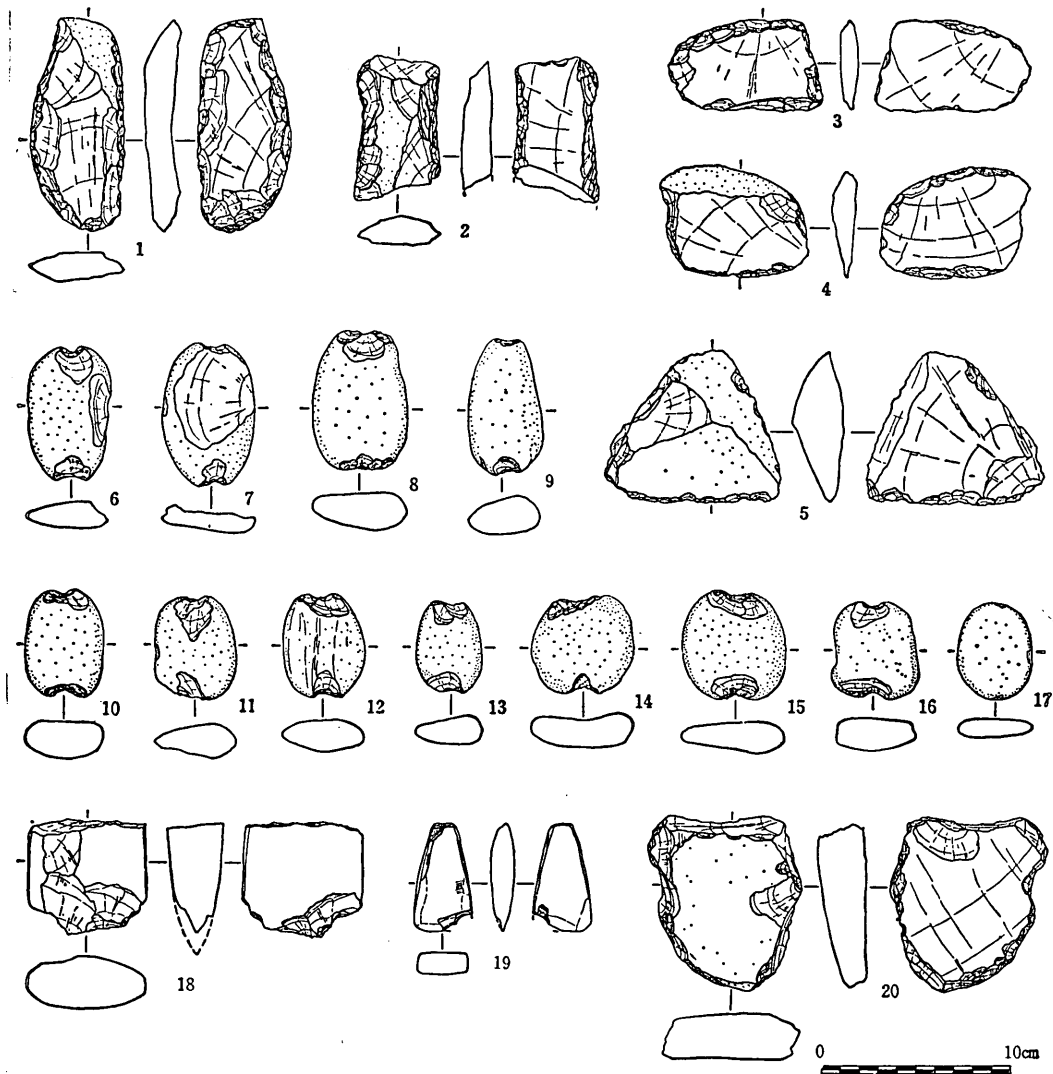
(6～17)は石錘であり、(14)の緑泥岩製のものを除いて他は硬砂岩製である。形態は円形状のもの(14～15, 17)、方形状のもの(16)、長円形状のもの(6～9)、楕円形状のもの(10～13)に分類される。石錘の凹みが大きいもの、凹みが小さなもの、凹みが2つのもの、凹みが3つのもの等さまざまである。

(18)は上・下部が大部分欠損してしまっており、中央部がわずかに残存している定角式磨製石斧である。チャート系石質を用いており、極めて丁寧に磨いてあるので、面はツヤツヤした光沢を放っている。先端の刃部はかなり鋭角になると思われる。

(19)は下部側縁の一部分がわずかに欠損している定型式小型磨製石斧である。刃部は鋭い角度で尖っている。断面はやや長円形状に近い形を成しており、一般的にみられる小型定角磨製石斧とはやや異なっている。石質は緑泥岩を利用している。この緑泥岩は天竜川から拾ってきて製作したのであろう。

(20)は周縁が敲打してある石器で、剝離調整は周縁に及び、中央部付近は自然面を残す。緑泥岩を利用。

以上、石器について述べてきたが、本遺跡では狭い範囲の発掘調査にもかかわらず、石錘の出土数の多いことにはおどろいた。当時、付近の小河川には多量の魚が生息していたのであろう。今後、山麓線上に分布する遺跡を調査したならば、同様に石錘は多く出土すると思われる。



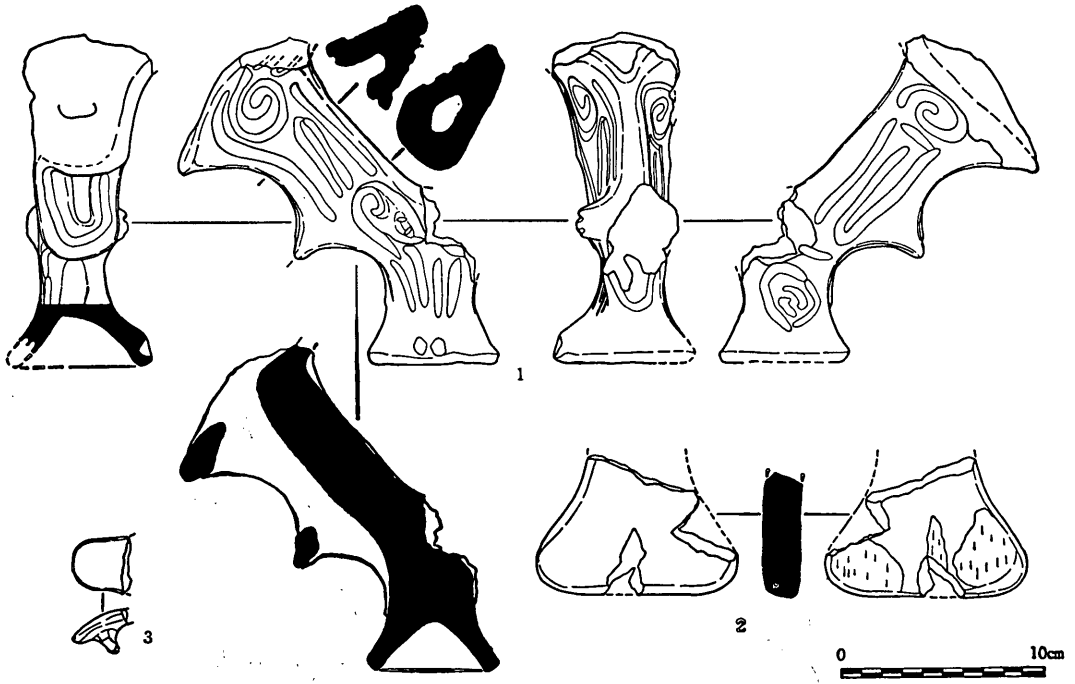
第10図 石器実測図

第3節 土製品

第11図の土製品は全て第1号住居址より出土したものである。(1)は把手状の土製品であると思われるが、確実に把手と決めつけてよいかは疑問が残る。全般的に幅広の沈線を渦巻状や縦位状に施し、頂部から右側縁部にかけてあたかも紐を通せるように管状になっている。黒褐色を呈し、焼成は良好で、胎土中に少量の長石を含む。

(2)はハート型に開いた土偶の底部と思われる。縄文中期によくみられる出尻の形態を成しており、女性土偶の一つであろう。明赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石を含む。

(3)は土偶の手の部分と思われる。なにせ、残存している部分が少量なので、正確なる形態は把握できない。赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石を含む。 (飯塚政美)



第11圖 土製品実測図

第V章 ま と め

昭和47年度中央道開通のおりに発掘調査を実施した百駄刈遺跡より東方300m位の所を幅5m位にわたって発掘調査を実施した。

調査によって検出された遺構は縄文中期後葉の竪穴柱居址1軒、弥生終末期の竪穴住居址1軒であった。この2軒の住居址の概略を記すと次のようになる。

縄文中期後葉の竪穴住居址を第1号住居址とする。本址の全体のプランは東側が用地外のために発掘調査は不可能であったが、現出したプランからみて、円形状と思われる。西・北側は後述する第2号住居址に切られている。柱穴は五本支柱穴と思われる。炉は石囲炉であり、底部に土器を敷いてあった。時期的にみて、土器の出土量は極めて少量であり、出土した土器片は全て、加曾利E期であった。

第2号住居址は前述したように弥生終末期の竪穴住居址で、第1号住居址同様に東側は用地外のため発掘調査は不可能であった。南側と西側で第1号住居址を切り、隅丸形状プランを呈す。支柱穴は4本と思われ、東西の柱穴間の北の方に正位の埋甕炉を有している。

中原遺跡のような山間部地帯に弥生後期の住居址が発見されたことは弥生後期高地性集落の存在を実証してくれた。沢水を集めたわずかな湿地帯に水田を作り、稲を生産していたことであろう。

その他の土器を編年について述べてみると下記のようなことになる。第8図(1)は田戸下層式、(2)は鶺ヶ島台式、(3)は茅山土層式、(4)は黒浜式、(5～8)は加曾利E式、(9～15)は堀の内式、(16～23)は加曾利B式、(24～26)は大洞式、(27～33)は縄文晩期条痕文土器群、いわば東海の檜王・五貫森式であろう。(34)は中島式。

石器としては打製石斧、磨製石斧(定角式乳棒状)、横刃型石器、石錘、磨石、敲石等々である。石器の特色として石錘の出土量が目立った。

(飯塚政美)

图 版



遺跡地を東側より眺む



遺跡地を南側より眺む



発掘調査終了（グリット掘完了）



工事実施中の遺跡地



第 1・2 号住居址



第 1 号住居址炉



第2号住居址の西壁石列



第2号住居址埋甕炉



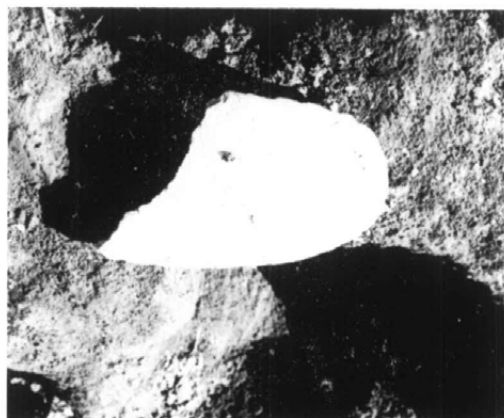
土器出土状況



注口土器出土状況



土器出土状況



石器出土状況



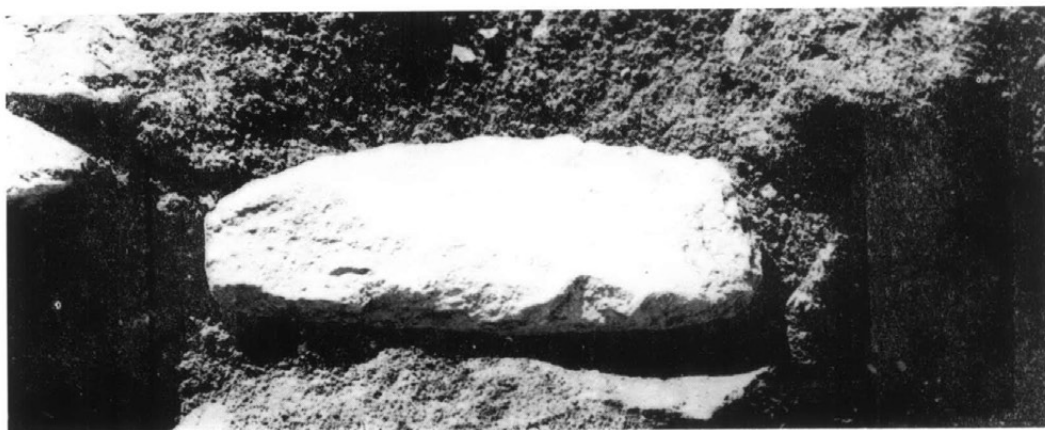
石器出土状況



石器出土状況



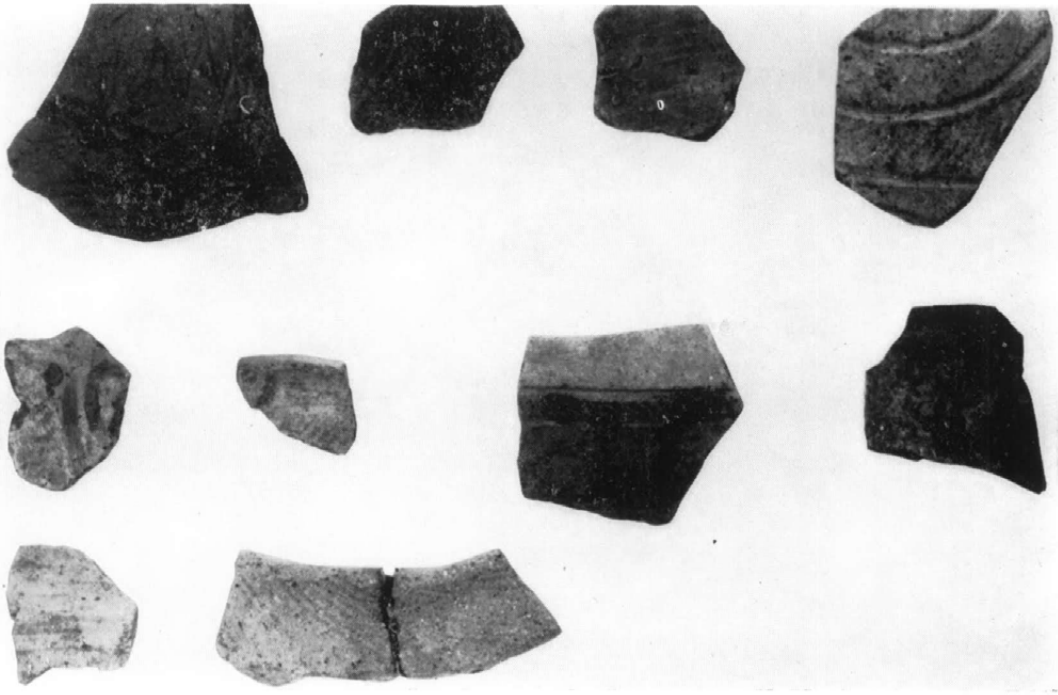
石器出土狀況



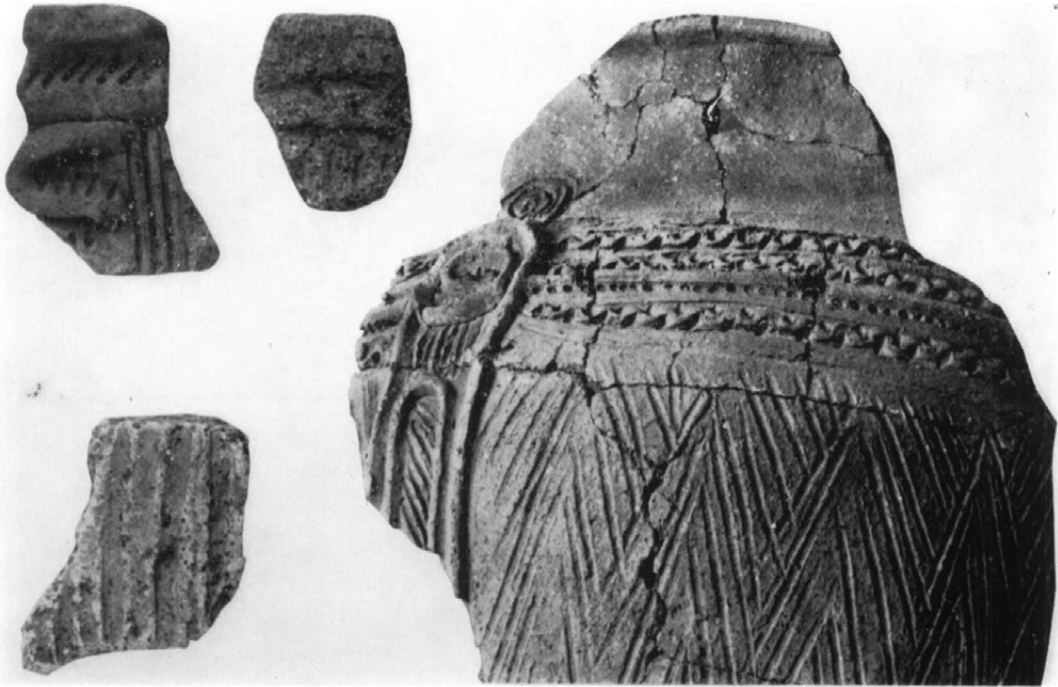
石器出土狀況



石器出土狀況



出土土器



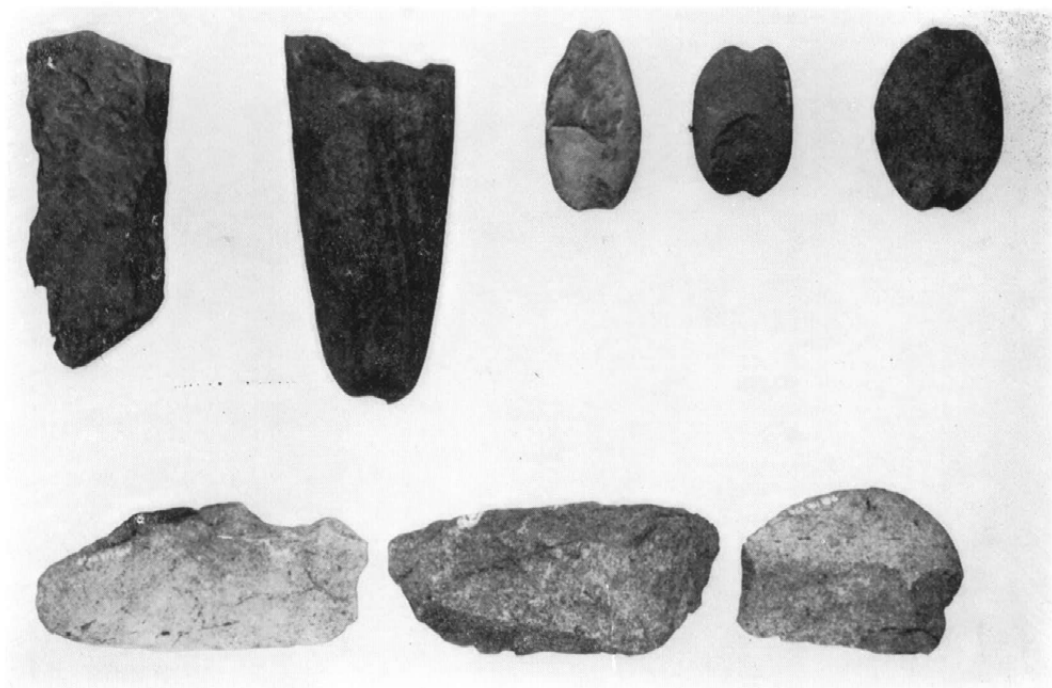
出土土器



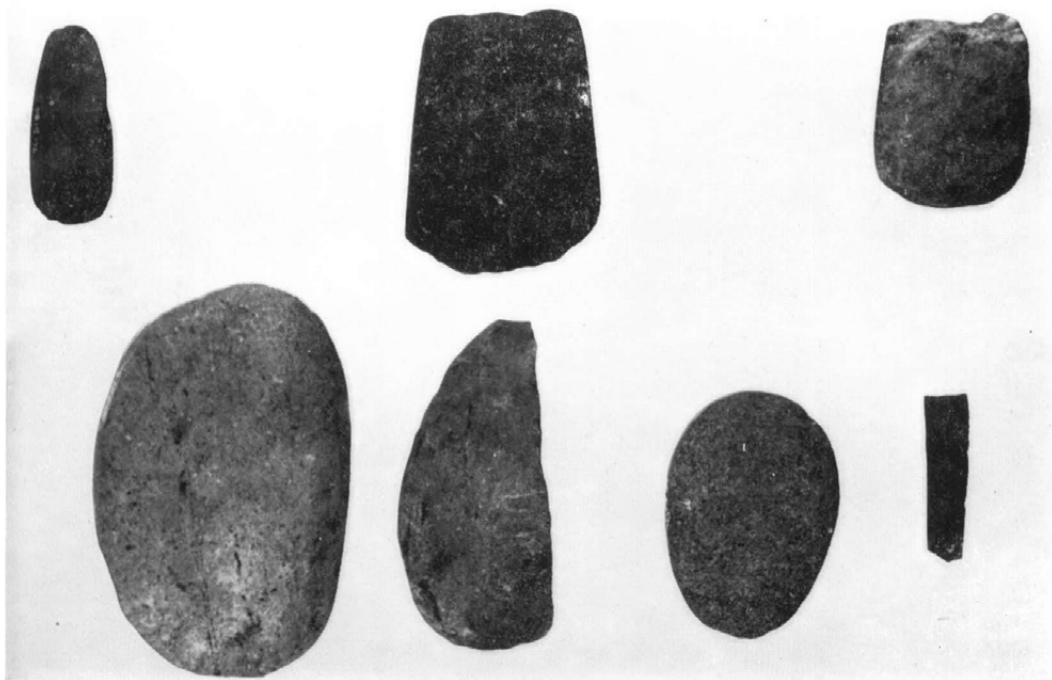
出土土器



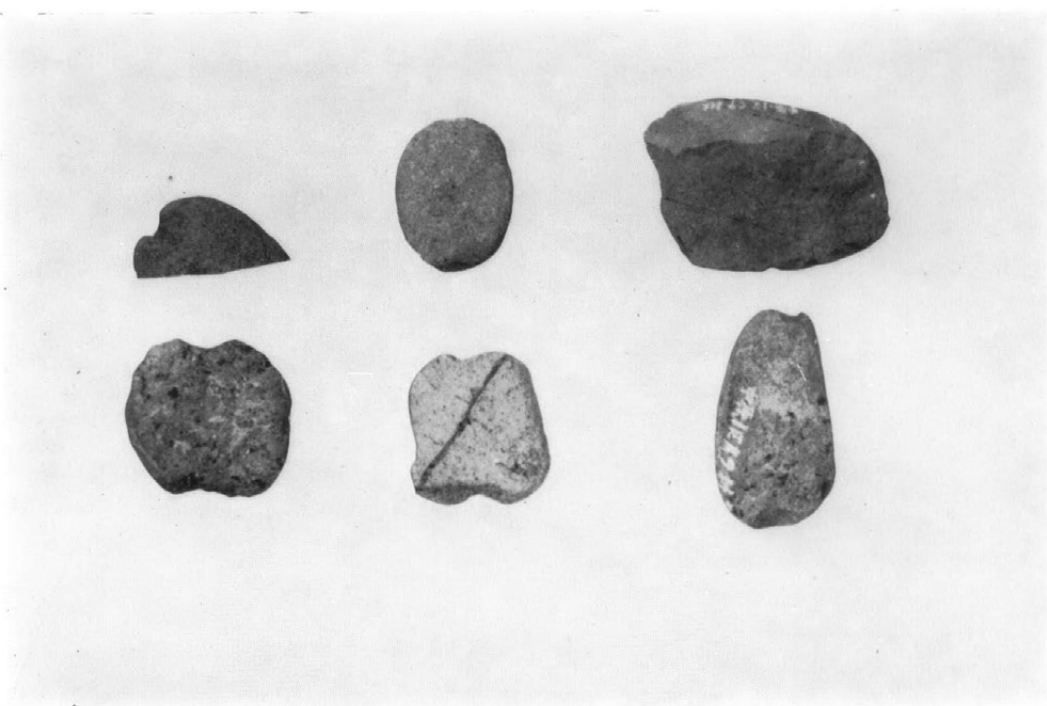
出土土器及び器製品



出土石器（第1号住居址）



出土石器（第1号住居址）



出土 石器



出土 石器

細ヶ谷 B 遺跡

目 次

目 次	(3)
挿図目次	(4)
図版目次	(4)
第 I 章 発掘調査の経過	(5)
第 1 節 発掘調査の経緯	(5)
第 2 節 調査の組織	(5)
第 3 節 発掘日誌	(6)
第 II 章 層 位	(8)
第 1 節 発掘用地内の地層	(8)
第 III 章 遺 構	(8)
第 1 節 溝状遺構	(8)
第 2 節 土 壙	(11)
第 IV 章 遺 物	(12)
第 1 節 土 器	(12)
第 2 節 石 器	(13)
第 V 章 ま と め	(15)

挿 図 目 次

第1図	地層実測図	(8)
第2図	地形及び遺構配置図	(9)
第3図	第1号溝状遺構実測図	(11)
第4図	第1号土塋実測図	(12)
第5図	土器拓影	(12)
第6図	石器実測図	(13)
第7図	石器実測図	(14)

図 版 目 次

図版1	遺跡全景
図版2	遺跡全景
図版3	遺 構
図版4	遺物出土状況
図版5	出土遺物

第I章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として、竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに付設する計画が実施されて徐々に工事が進ちょくしている。伊那市においては、西箕輪、西春近、伊那地区がこれに該当し、昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡。昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡、金鋳場遺跡。昭和54年度に西箕輪上戸宮垣外遺跡、西箕輪中条天庄Ⅱ遺跡、小花岡遺跡。昭和55年度に西箕輪吹上桜畑遺跡の調査が行われてきた。昭和57年度は伊那船窪船窪遺跡、西町大坊城畑遺跡、西春近山本城平遺跡、宮林遺跡・山の根遺跡の緊急発掘調査を行った。

本年度は大境遺跡・中原遺跡・細ヶ谷B遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和57年8月31日 長野県教育委員会文化課臼田指導主事が来伊し、伊那市教育委員会社会教育課職員、関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と三者協議を混じえながら予算査定を行う。

昭和58年9月21日 夜、宮の原会所で地権者と打ち合せをする。伊那市教育委員会職員と関東農政局伊那西部農業水利事業所職員が出席する。

昭和58年9月30日 伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

昭和58年10月1日 関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と伊那市教育委員会社会教育課職員立合いのもとに発掘調査地区に境界用のテープを張る。

昭和58年10月14日 伊那市教育委員会社会教育課職員が細ヶ谷B遺跡に該当する地権者宅を訪問し、発掘承諾書に署名、捺印してもらう。農政局側の負担額は当初は4,320,000円であったのを3,120,000円に減額する。

第2節 調査の組織

細ヶ谷B遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊澤 一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福澤 総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽 映土	伊那市教育委員長
調査事務局	三澤 昭吾	伊那市教育委員会教育次長
"	竹松 英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
"	柘植 晃	" " 課長補佐
"	武田 則昭	" " 係長
"	高木 いずみ	" " 主事

第I章 発掘調査の経過

発掘調査団

団 長	友 野 良 一	日本考古学協会会員
副 団 長	根 津 清 志	長野県考古学会会員
"	御子柴 泰 正	"
調 査 員	福 沢 幸 一	"
"	飯 塚 政 美	日本考古学協会会員
"	小 池 孝	"

第3節 発掘日誌

昭和58年11月25日 晴 細ヶ谷B遺跡へテントや発掘器材を運搬してテントを建てる。テントは細ヶ谷B遺跡の遺物や遺構の検出がそうないものと思われたので、テントを一張り建てる。

昭和58年11月26日 晴 本日グリットを設定する。グリットは川に面した北側を基点にし、センターを中心に2m×2mとする。グリット名は東から西へA～B北から南へ1～47と決め、A1より市松状に掘りはじめる。A1～A5ライン付近は南から北への傾斜のため、黒土層が深く、深い所は約1m位もあった。遺物は散布的に出土した。

昭和58年11月28日 晴 グリット掘りを南へ、南へと掘り進めていく。A15付近は最も高い地点とみえて、黒土は浅くて50cm位あった。

昭和58年11月29日 晴 グリット掘りを南へ南へと掘り進めていく。遺構は何も検出されなかったが、遺物はかなりの量出土した。

昭和58年11月30日 曇のち雨 グリット設定地区の最南端部付近に東西に長く黒い落ち込みがみられ、これのプランをつきとめるために拡張を試みる。拡張してみると、溝状になりそうであったから、これを溝状遺構とする。

昭和58年12月1日 晴 前日検出し、プランを確認した溝状遺構を完掘し、清掃及び写真撮影を終了、土層図の実測

昭和58年12月2日 晴 溝状遺構の南側のグリットを掘り下げて



発掘風景

いと、落ち込みがみられ、第1号土壙とし、プランを確認し、掘り下げを実施する。

溝状遺構の実測。

昭和58年12月3日 晴 遺物が割合に多く出土したグリット付近を拡張する。

昭和58年12月5日 晴 第1号土壙を清掃し、写真撮影終了。第1号土壙の実測

昭和58年12月6日 晴 全測図の作製、道具や現場のあとかたづけをする。

昭和58年12月7日 晴 道具の水洗い、あとかたづけを実施。

昭和58年12月8日 晴 テントのとりこわし。午後考古資料館へ発掘器材を搬入する。本日をもって発掘調査は一応終了する。

昭和59年2月～3月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集。

昭和59年3月 報告書を刊行する。

(飯塚政美)

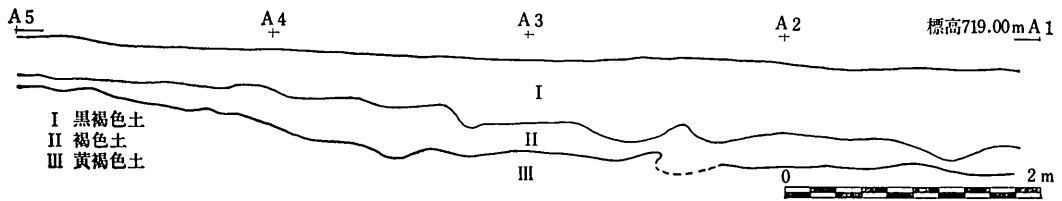
作業員名簿

酒井岩夫、北原一喜、池上大二、埴橋程三、大野田英、唐木由人、唐木淳、酒井とし子、城倉芳美、城倉すみ子、大野田三千代、網野実子、有賀文子、橋爪ちえ子、柴佐一郎、三沢寛、建石紀美子、大久保富美子、城倉直子、後藤重美（敬称略順不同）

第Ⅱ章 層 位

第1節 発掘用地内の地層

本遺跡地の基盤は発掘地点の中央部がやや高くなっており、この地点を境にして、北、南へやや傾斜を呈している。地層は割合に安定した状態を呈していた。基盤を成す岩石は大部分がホルンヘルスであり、庭石になりそうな岩が発掘調査グリット内にしばしば検出された。



第1図 地層実測図

第Ⅲ章 遺 構

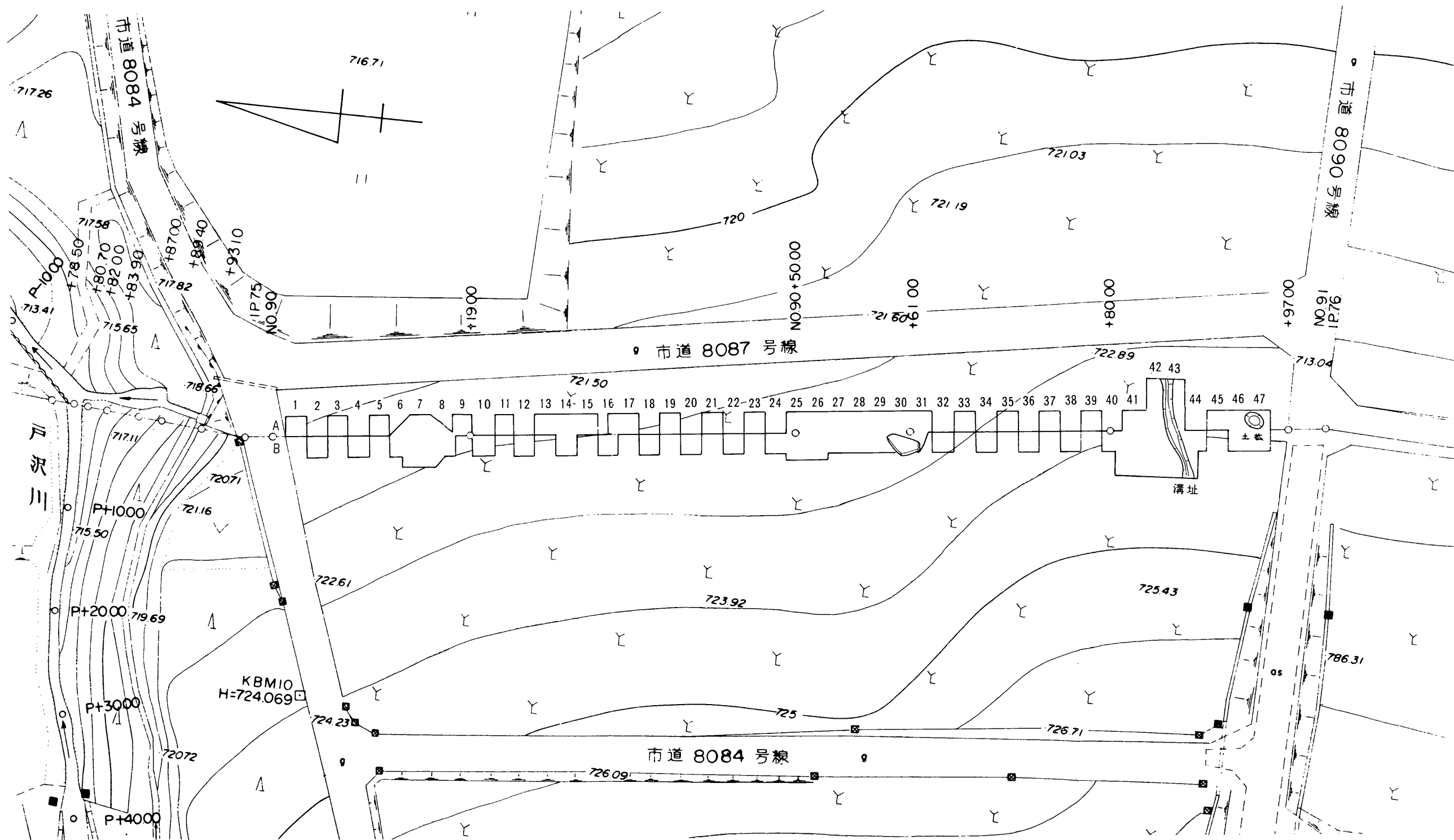
第1節 溝状遺構

第1号溝状遺構（第3図，図版3）

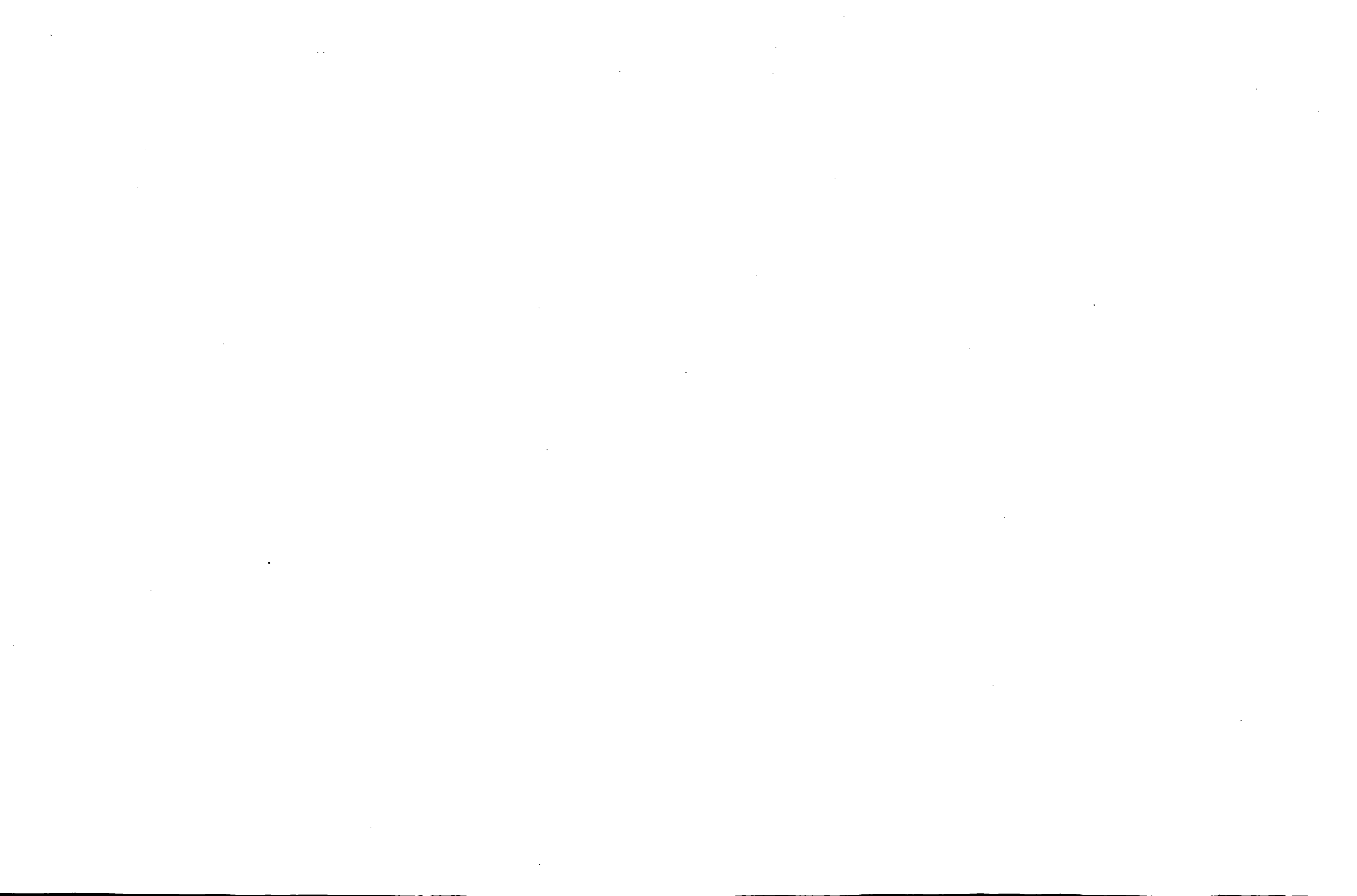
本遺構は発掘地区の最南端部に位置し、A42～A43、B42～B43にかけて、東西に長く検出された。遺構はまだ、西、東に広がっていると思われるが用地外のために調査は不可能であった。表土面から30cm位下った砂礫黄褐色土層面を掘り込んである。

平面プランは掘り込み面が若干の凹凸を呈してはいるが、一般的に東西に細長い形状を呈している。その幅は広い所で1 m30cm，狭い所で95cm位を測る。壁面は外傾気味で、凹凸が多く、礫が無数露出していた。

床面はかたく、ところどころに礫が露出し、ゴツゴツ状を呈していた。また同面状にはところどころにピット状の落ち込みが検出されたが、これは水が自然に溜って、掘ったものと思われ、人為的な工作は何も認められなかった。底面は基盤が西から東へ傾斜しているために、それに応じて成り立っていた。覆土は溝状の遺構であるがために複雑な層序関係を呈しており、西側一帯では上から表土、黒褐色土、黒色土、暗黄褐色土、砂礫多量に混入、黄褐色土混入黒色土の順に堆積していた。東側一帯では上から表土、黒褐色土、黒色土、茶褐色土、礫混入黒褐色土、礫混入暗黄褐色土の順に堆積していた。



第2図 地形及び遺構配置図 (1:400)



第2節 土 壙

(第4図, 図版3)

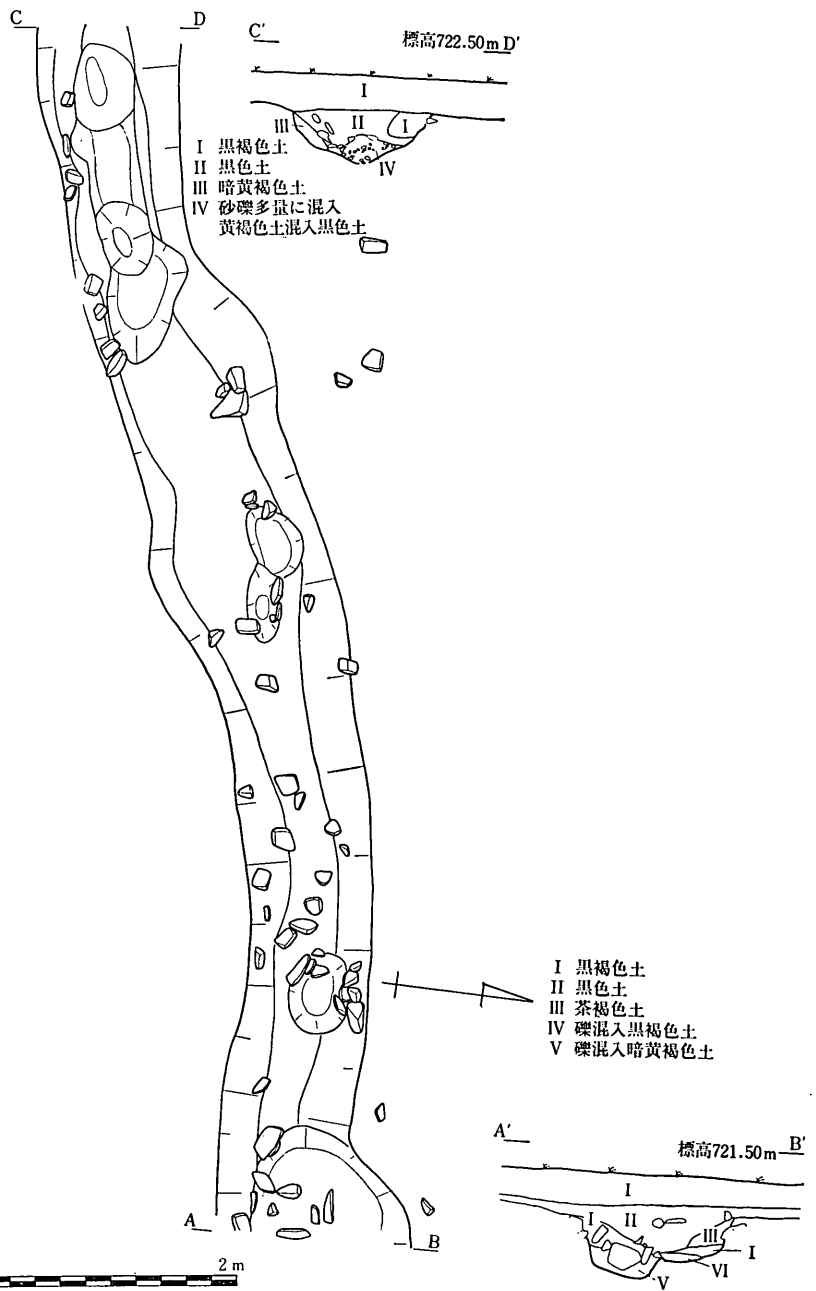
第1号土壙

本遺構は前述した第1号溝状遺構の南側、今回発掘調査を実施した最南端に検出された土壙である。

表土面より30位下った砂礫黄褐色土層面を掘り込んで構築しており、その規模は南北1m70cm、東西1m45cm位を測る。平面プランは南側の一部で突き出ているが、全般的に円形状を呈する。

壁面は南はなだらかであり、北、西、東の三壁は外傾気味を呈する。四壁はともに細礫を含んでいるのでゴツゴツしていた。

掘り込み面から底面までは50cm位を呈していた。床面は砂礫層に達しており、凹凸が多く大小様々な石が露出していた。覆土中に少量の炭化物の検出があったが、遺物は何も出土しなかった。



第3図 第1号溝状遺構実測図

(飯塚政美)

第IV章 遺物

第1節 土器

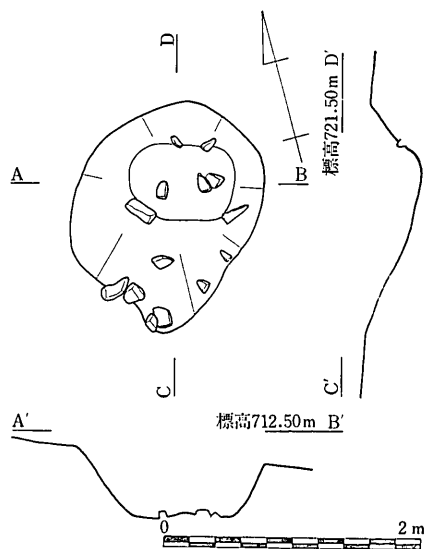
第5図(1~20)は遺構外から出土した土器を登載してある。(1~3)は外面に絡縄体圧痕の縄文を施してある一派。胎土中に多量の繊維と雲母を含んでおり、その雲母がきらきら輝いている。焼成は全般的に悪い。(1)は黒褐色を、(2~3)は明茶褐色を呈す。(1)は縄文地の上に櫛状工具による刺突文を付け加えてある。

(4~5)は外面に爪形文を加えてある一派。二つとも少量の繊維を含み、焼成は悪く、黒褐色(4)、明黄褐色(5)を呈す。(4)は爪形文の下に撚糸文を網目状に配し、(5)は爪形文の下に沈線を横走、斜走させてある。

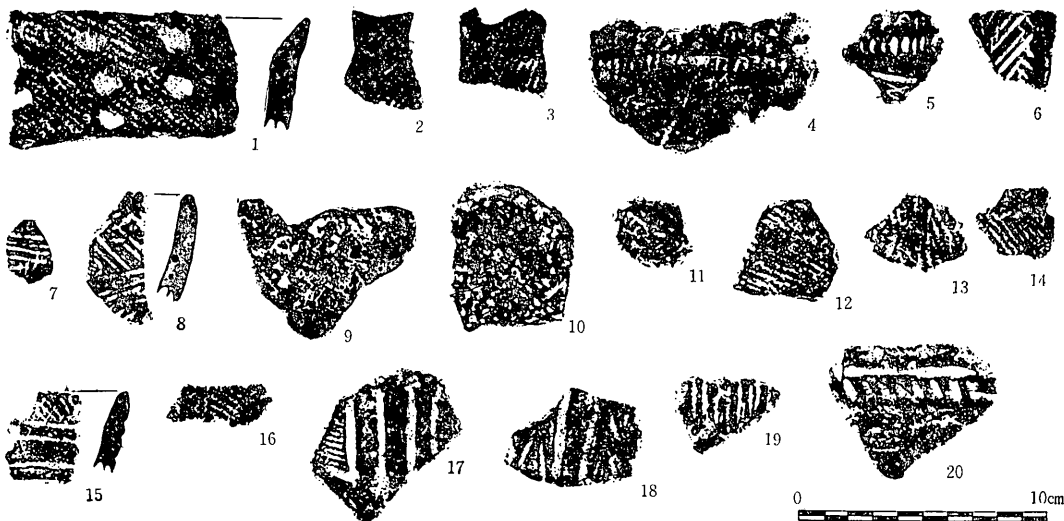
(6~8)は少量の繊維を含み、沈線によって幾何文風に意匠してある一派。全て黒褐色を呈し、焼成は不良である。

(9~14)は外面に斜縄文を施し、胎土中に多量の繊維を含んでいる一派。縄文の太目のもの(9~10, 11, 13), 縄文の細目のもの(11, 14)に大別できる。色調は赤黄褐色(9~12), 黒褐色(13), 赤褐色(14)を呈す。焼成は全般的に不良であった。

(15)は口縁部破片であって、その文様構成は上部で沈線を交互状に配し、籠目風にしてある。下部は沈線が横走。明茶褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は良好。



第4図 第1号土坑実測図



第5図 土器拓影

(16) は縄文地に沈線を懸垂文風に施してある一派。明黄褐色を呈し、焼成は不良で、少量の長石を含む。

(17) は沈線によって区画された中に細い沈線が斜走している一派。明黄褐色を呈し、多量の長石を含み、焼成は不良である。

(18) は無文地に低い隆帯を貼り付け、それを垂下させ、ところどころに八の字状の文様をつけてある一派の赤褐色を呈し、焼成は良好。

(19) は無数の沈線が縦走している一派。明黄褐色を呈し、焼成は不良である。

(20) は無文地に太い隆帯を横的に付け加え、その上に刻目を押捺してある一派。赤褐色を呈し、多量の雲母や長石を含み、焼成は不良である。(飯塚政美)

第2節 石 器

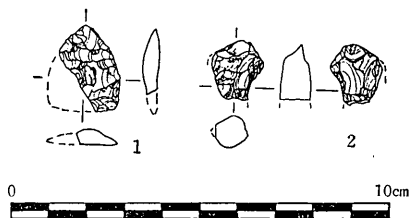
第6図(1～2)はグリット内から出土した黒耀石製の石器である。(1)は左側縁の下部は欠損しているが、三角形の近い石鏃である。(2)は若干えぐり込みのあるノッチ状スクレーパーである。

第7図(1～4)は撥形の打製石斧である。下部の開き具合が大きいもの(1)、やや開き気味(2～4)とに大別される。(1)は完型品であり、(2～4)の上部は完全に欠損してしまっている。(1～4)は剝離痕が現存している周縁に施されている。(1、3)は硬砂岩、(2)は雲母ホルンヘルス、(4)は緑泥岩を利用している。

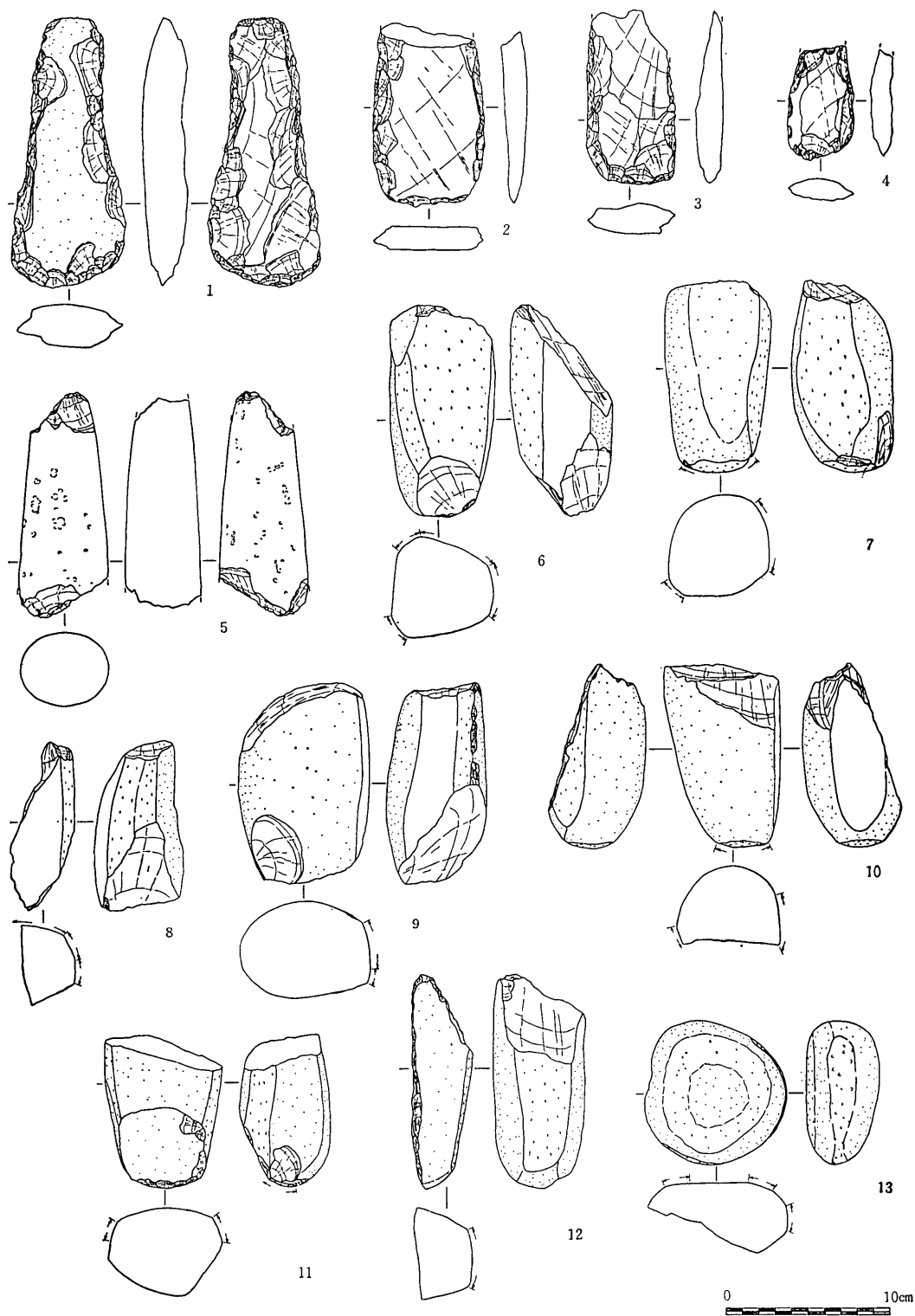
(5)は乳棒状磨製石斧であり、両端は欠損している。側面は長形状、断面は円形状を呈す。緑泥岩を利用。

(6～13)は縄文早期後半によくみられる穀磨石の一種かと思われる。この石器の特徴は石の片面あるいは両面をタタいたり、磨いたりしてある。たたきあるいは磨いたりした仕方によって区分してみると次のようになる。

(6)は3面が軽いタタキ、1面が磨り。(7)は2面が軽いタタキ。(8)は1面が磨り、2面が軽いタタキ。(9)は1面が磨り、1面が軽いタタキ。(10)は(9)と同様、先端部はタタキ。(11)は2面が軽いタタキ、先端部はタタキ。(12)は1面が軽いタタキ。(13)は3面が軽いタタキ。全て硬砂岩を利用。(飯塚政美)



第6図 石器実測図



第7図 石器実測図

第V章 ま と め

細ヶ谷B遺跡の調査は今回で2回目となる。第1回目の調査は昭和47年度中央道開通の折に実施されている。今回の調査は前述した2遺跡同様限られた範囲の調査であったために、あまり成果はあがらなかった。

遺構として、溝状遺構1基と、土塋1基が検出した。これらの遺構の形態及び形状については前に述べてあるので今回は割愛する。

その他の遺物として土器・石器がある。第5図土器拓影に基づいて、編年を記すと下記のようなになる。第5図(1～3)は子母口式土器、(4～5)は東海の粕畑式土器、(6～8)は関東の鶉ヶ島台式土器、(9～11)は茅山系統の土器、(12～14)は黒浜式土器、(15)は縄文中期初頭土器、(16～19)は加曾利E式土器、(20)は加曾利B式土器にそれぞれ編年づけられると思われる。

石器としては三角形鏃、スクレーパー、打製石斧、乳棒状磨製石斧、穀磨石が出土している。三角形鏃やスクレーパーは縄文早期に位置づけられると思われる。

穀磨石は本来押型文土器に付随する石器として知られている。今回押型文土器は一片も出土しなかった。中央道発掘調査の折にはかなり多量の押型文土器が出土しており、よって広範囲の調査を実施したならば、押型文土器及び同時期の遺構が検出されるであろう。 (飯塚政美)

圖 版



遺跡地を東側から眺む



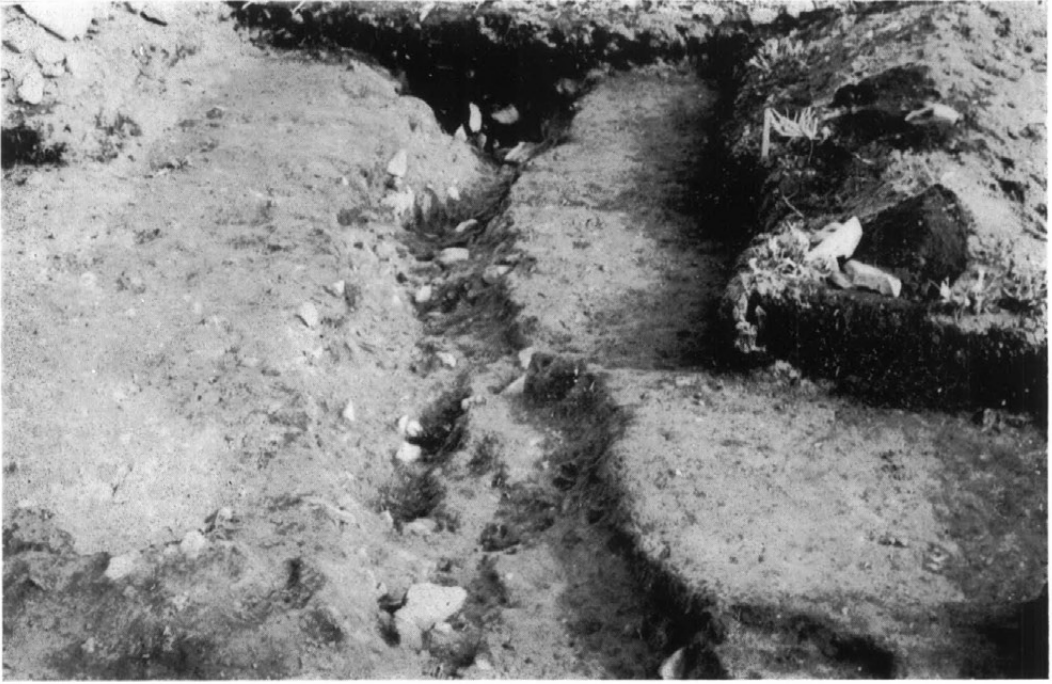
遺跡地を北側から眺む



遺跡地発掘調査終了（グリット掘り）



工事実施中の遺跡地



溝状遺構



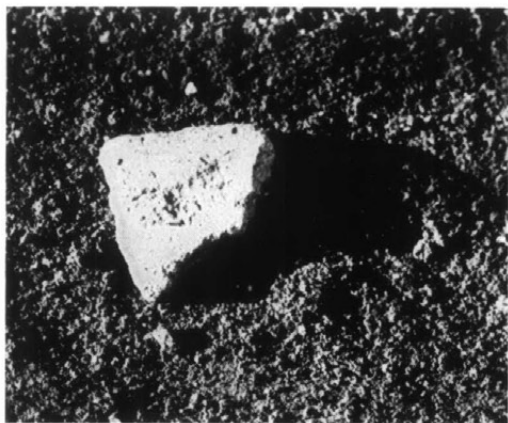
第 1 号土城



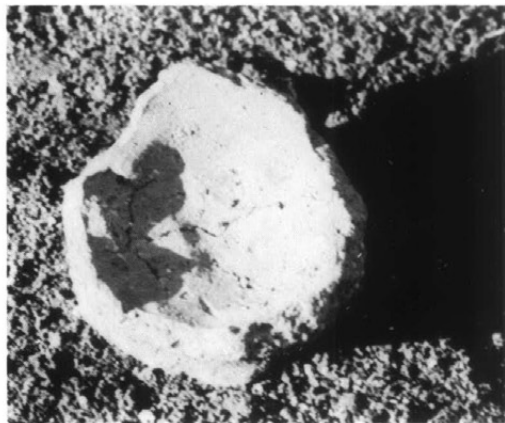
土器出土状況



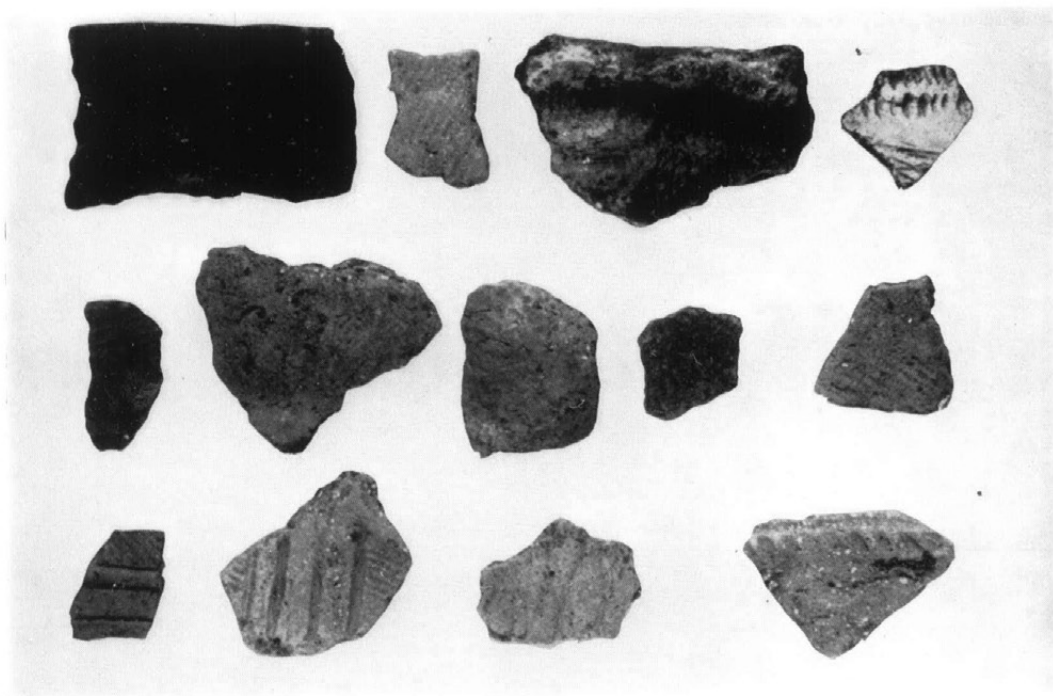
土器出土状況



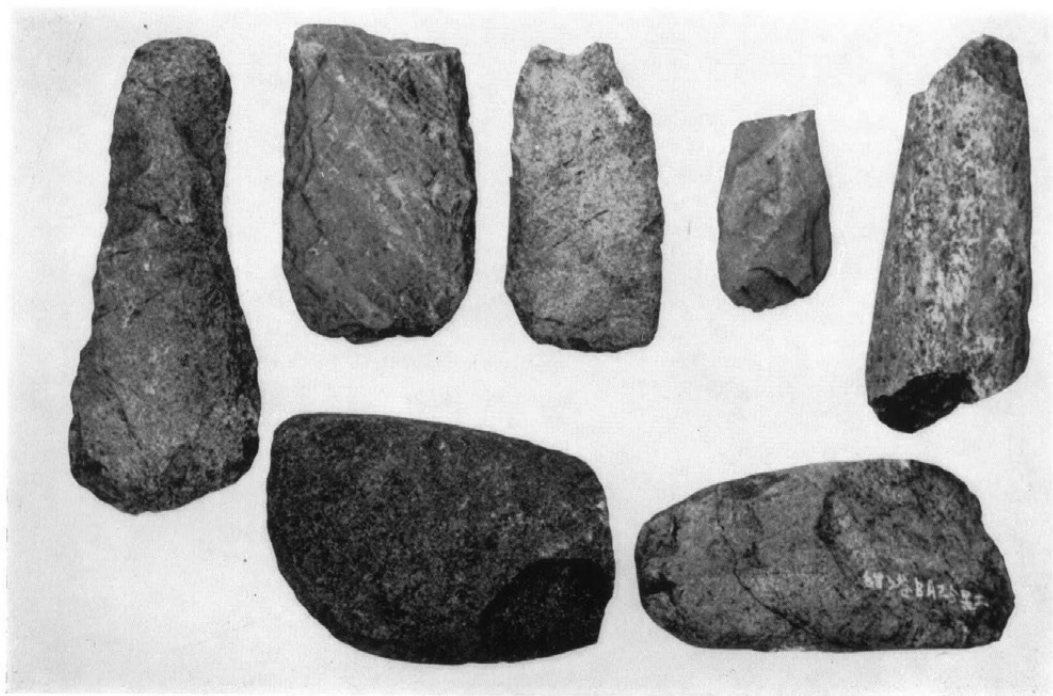
土器出土状況



土器出土状況



出土土器



出土石器

大境・中原・細ヶ谷 B 遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和59年3月17日 印刷

昭和59年3月17日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 株式会社 きょうせい

北関東支社 東京都新宿区西五軒町52

伊那市史編纂委員会

